

四十八人目

森田草平

青空文庫

毛利小平太は小商人に身を扮して、本所二つ目は相生町三丁目、ちようど吉良左兵衛邸の辻版小屋筋違い前にあたる米屋五兵衛こと、じつは同志の一人前原伊助の店のために、今日しも砂村方面へ卵の買い出しに出かけたが、その帰途に、亀井戸天神の境内にある掛茶屋に立ち寄って、ちよつと足を休めた。葭簀の蔭からぼんやり早稲の穂の垂れた田圃づらを眺めていると、二十ばかりの女中がそばへやってきて、「お茶召しあがりませ」と言いながら、名物葛餅の皿と茶盆とを縁台の端に置いて行つた。

小平太は片手に湯呑を取り上げたまま、どこやらその女の顔に見覚えがあるような気がして、後を見送つた。女の方でもそんな気がするかして、二人の子供を連れた先客の用を聞きながらも、時々こちらを偷み見るようにした。小平太は「はてな？」と小首を傾げた。が、どうしても想いだせぬので、二度目にその女が急須を持ってそばへ来た時、「姐さん、わしはどつかでお前さんを見たように思うが——」と切りだしてみた。

「はい」と、女は極きまりの悪そうに顔を赧あからめながら、丁寧ていねいに小腰を屈めた。「わたくしも最前からそう思い思いあんまりお姿が変つていらつしやいますので……もしやあなたさまは元鉄砲洲のお屋敷においでになつた、毛利様ではございませぬか」

「して、お前さんは？」

小平太はぎよつとして聞き返した。

「わたくしは同じお長屋に住んでおりました井上源兵衛の娘でございます」

「ほう、井上殿のお娘御！　そういえば、さつきから見たように思つたのもむりはない」と、小平太はあたりを見廻しながら低てい声せいにつづけた。井上源兵衛といえ、九両三人扶ぶ持ちを頂いて、小身ながらも、君候在ぎいせい世せいの砌みぎりはお勝手元勘定方を勤めていた老人である。「それにしても変つた所でお目にかかりましたな。で、お父上はその後御息災でいられるかな」

「はい」と言つたまま、娘はきゆうに下を向いて、はらはらと涙を滾こぼした。

「ふうむ？」と、小平太は相手の容子を見い見い訊ねてみた。「では、何か変つたことでもござりましたか」

「は、はい」と、娘は前垂の端はしで眼の縁を拭ぬぐつて、ちらと背後うしろを振り返りながら、これもあ

たりへ気を兼ねるように小声でつぶけた。「父は昨年なの暮に亡くなりました。それから引続いて母が永い間の煩わづらいに、蓄えとてもござりませねば、親子揃そろって一時は路頭に迷おうとしましたが、長屋の衆が親切におっしゃってくださいます、この春からここで勤めさせていただくようになったのでございます」

「それはそれは、とんだ苦勞をなされましたな」と、小平太も相手を勞いたわるように言った。

「だが、これも時代時節ときよじせつというもの、そのうちにはまたいいことも運めぐつてきましよう。あまりきなきな思つて、あなたまで煩わぬようにされるがようござりましようぞ」

「ありがとう存じます」と、娘は優しく言われるにつけて、またもやせぐりくる涙を前垂の端で押え押えました。

「で、母御はははじはその後ちつとはおよろしい方でござるかな」

「それがどうも拂はかばか々しくございませので……この夏から始終寝たり起きたりしていましたが、秋口からはどつと床についたきりでございますの」

「それはまた御心配な」と、小平太は心から同情するように言った。「まあ、せいぜい大切たいせつにしておあげなさるがいい。手前もまた何かのおりにお訪ねすることもござろうが、ただ今のお住家すまいはこの御近所で？」

「はい、妙見様みょうけんさまの裏手の七軒長屋で、こちらの茶店へ出ているおしおと聞いていただければ、じき知れますの」と言いかけて、ふと気がついたように、「でも、大変汚い所むじでございませうので、あなた方にいらしていただくような……」と、遠慮がちに言いなおした。「いやなに、今では手前もごらんのとおりの身の上、その御遠慮にはおよびませぬわい」と、小平太はちよつと袖のあたりを振返りながら、わざとらしく笑つてみせた。こんな風に身を落してこそおれ、今に見よ、同志揃つて吉良邸に乗りこみさえすれば、主君の仇を討つた忠義の士として、世に謳うたわれる身だというような意識がちらと頭の中を翳かすめたのである。

「それに」と、彼はまた何気なくつぶけた。「あのへんは手前もちよくちよく参りますから、また通りがかりに寄せていただくこともございませう。どうかお帰りになつたら、小平太がよろしく申したと、母御にお伝えくださるかい」

まだ何やら訊いてみたいような気もしたが、人目を惹ひくのがいやさに、小平太は茶代を払つて、そこそこに茶店を出てしまった。年が若いだけに、思わぬ邂めぐりあい逅あひから妙に心をそそられたところへ、女の涙に濡ぬれた顔を見て、大事を抱えた身とは知りながら、ついそれを忘れるような気持にもなつたものらしい。夕日を仰いで、田圃たんぼの中の一筋道を辿たどりな

がらも、彼は幾度か後を振返ろうとして、そのたびにようよ様の思いで喰いとめた。

二

去年三月主君 浅野内匠頭、殿 中にて高家の筆頭 吉良上野介を刃傷に及ばれ、即日芝の田村邸において御切腹、同時に鉄砲洲の邸はお召し上げとなるまで、毛利小平太は二十石五人扶持を頂戴して、これも同志の一人大石瀬左衛門の下に大納戸係を勤めていた。当年は瀬左衛門より一つ上の二十六歳であった。その後赤穂城中における評議が籠城、殉死から一転して、異議なく開城、そのじつ仇討ときまつた際は、彼はまだ江戸に居残つていたので、最初の連判状には名を列しなかつた。が、その年の暮に大石内蔵助が、かねて城明渡しの際恩顧を蒙つた幕府の目附方へ御礼かたがた、お家の再興を嘆願するために、番頭 奥野将監と手を携えて出府した際、小平太は何物かから押されるような気がして、内蔵助の旅館を訪ね、誓書を入れて義徒の連盟に加わつた。何物かとはいわゆる時代の精神である。当時の侍は、君父の仇をそのままに差措いては、生きて人交りができなかつた。彼もその精神に押しだされたのである。そして、

内蔵助の帰洛きりやくに随行ずいこうして、上方かみがたへ上つて、しばらく京阪の間に足をとどめていた。

時代の精神と、もう一つは、世が太平になつたために、ひとたび主しゅに放れた浪人は喰うことができない、何人なれも抱え手がないという事実じじつに圧迫あつぱくされて、小平太のほかに、誓書を頭領あたらたにいたして、新あらたに義盟ぎめいにつくもの前後踵くびすを接した。いかに喰えない浪人生活なみのりよりも、時代の精神に追われて死につく方が、彼らにとつて快こころよく思われたかは、主家の兇きよう変へんの前に、すでに浪人なみのりしていた不破数右衛門ふわかずえもん、千葉三郎兵衛ちねぼ、間新六はざましんろくの徒とが、同じように連盟れんめいに加わつてきたのでも分る。とにかく、元禄十四年の暮から明くる年の春にかけて、連判状れんぱんじょうにその名を列つらねるものじつに百二十五名の多きに上つた。しかも、その中には、内匠頭しやていの舎弟しやてい、大学だいがくを守りたてて、ならぬまでもお家の再興さいこうを計つた上、その成否せいひを見定めてから事を挙げようとするものと、そんな宛にもならぬことを当にして、便々と待つてはいられない、その間に敵かたきと覘ねらう上野介かみの身に異変いへんでもあつたらどうするかと、一途いちずに仇討かたきの決行けつこうを主張するものがあつて、硬軟両派こうなんりやうぱいに分れていた。前者ぜんしやの音頭おんどを取るものは、さきに大石おおいしと同行どうぎやうした奥野将監おくのしょうかんを始めとして、小山こやま、進藤しんどうの徒とであり、後者こうしやは堀部安兵衛ほりべやすへい、奥田孫太夫おくたそんたふなどの在府ざいふの士し、並びに関西かんせいでは原総右衛門はらそうへいもん、大高源吾おほたかげんご、武林唯七うりんただしちらの人々ひとびとであつた。その争あらそひいが烈はげしくなるにつれて、前者ぜんしやは後者こうしやを罵ののしつて、あいつらがそんなに逸や

のは喰うに困るからだと言った。そして、それは事実でもあった。元禄十五年の正月二十六日に、堀部安兵衛、奥田孫太夫、高田郡兵衛三人の連名で、江戸から大石に宛てた書面に、上方の連中がゆつくりしていられるのは、敵の様子を目の前に見ていないからだ、それを毎日見せつけられている吾々の胸中也察してもらいたいというような意味のことを述べた末に、「同志の中でも器用なものは、医者 of 真似をしたり鍼医になったりして、それぞれ渡世の道を立てているが、吾々は仇討専門で、ほかに芸がないから日々喰い詰める一方である。願わくば、あまり見苦しき体になり下らぬうちに、一日も早く決行したい」といったような一節がある。これは浪士の実情をありていに道破したものといわなければならぬ。

ところで、内蔵助自身は、どちらかといえば前者に属していた。彼は仇討連盟の盟主になった。しかも、その裏面においては、全然それと反方向するような主家の再興に力を尽していた。あるいは主家の再興は再興、仇討は仇討で遣る気であつたと言うかもしれない。しかし主家を再興した後で、仇討のできないことは、何人よりも内蔵助自身一番よく知っていた。仇討をしなければ、同志を欺いたことになるばかりでなく、永く世の指弾を受けられるかもしれない。しかも、一国の重寄に任ずる城代家老としては、主の恨みを晴らすと

いうことも大切であろうが、それよりもまず主家の祭祀の絶えざることを念とするのが当然だと信じたのである。この信念の下に、彼は去年の暮に出府した際も、あらゆる手蔓を求めて目附衆へ運動もしたし、それから後も山科に閑居して、茶屋酒にうつつを脱かしていると見せながら、暮夜ひそかに大垣の城下に戸田侯（内匠頭の従弟戸田采女正氏定）老職の門を叩いて、大学擁立のことを依頼した事実もある。もつとも、そうした運動の奏効おぼつかないことは、彼といえどもよく承知していた。が、全然徒勞に終るものとも思っていなかった。再興の望みが絶対になかったように思うのは、事後においてそれを見るからで、当時にあつては、四圍の情勢から見て、かならずしもその望みがなかったとは言われない。幕府がいったん取潰した家を再興した先例はいくらもある。ましてや、相手の吉良家に何のお咎めがなかった点から見ても、その渦中にあつた浅野家の浪人どもには、今にも再興の恩命が下るように思われたかもしれない。

とにかく、内蔵助からしてそういう気持であつたために、正月の山科会議では、持重派が勝ちを制して、今年三月亡君の一周忌を待つて事を挙げようといつかねての誓約も当分見合せとなつた。そして、二月の初めには、一党の軍師といわれる吉田忠左衛門が、内蔵助の命を含んで、関東の急進派鎮撫のために江戸へ下ることになつた。彼が浪士ども

に分配するために、軍用金の中から若干の金を携えて行ったことはいうまでもない。

江戸の急進派の中でも一番あせっていた堀部安兵衛は、それからも絶えず書を寄せて一挙の即行を迫っていたが、とかくに煮えきらぬ内蔵助の態度をもどかしがって、六月の末には単身東海道を押上ってきた。そして、山科の大石の許へも立ち寄らず、大阪の原総右衛門、京の大高源吾など上方の急進派を糾合して、大石の一派とは別に、自分たちだけで大事を決行しようと計った。ここに赤穂義士の連盟も分裂の危機に瀕したのである。が、幸か不幸か、七月の二十二日になって、江戸の吉田忠左衛門から浅野大学が芸州広島へ流謫を命ぜられたことを報じてきた。同じく二十五日には、奥田孫太夫からも同様の書面がとどいた。こうなればもう是非がない、主家再興の望みは永久に絶えたのである。で、内蔵助もついに意を決して、七月二十八日、京、伏見、山科、大阪、赤穂などに散在する同志と円山重阿弥の別墅に会合した上、いよいよ仇討決行の旨を宣言した。そして、自分も十月の末には江戸へ下るから、面々においてもそれまでに、二人三人ずつ仇家へ気づかれぬよう内々で下向せよと言いわたした。それを聞いて、義徒は皆踴躍した。中にも堀部安兵衛は、大石と離れてさえ決行しようとしていただけに、明くる朝すぐに発足して、潮田又之丞とともに江戸に走せ下った。この二人は、途中浜松の駅で、

芸州へ流されて行く浅野大学の一行に出逢つたが、後難の相手の身に及ばんことを恐れて、わざとお目通りを願わないで、素知らぬ顔に行き過ぎてしまったと言われる。

横川勘平は円山会議に先立つて、七月の末にはすでに江府へ下つていた。つづいて岡野金右衛門、武林唯七、それに毛利小平太の三人も八月の二十七日に江戸へ着いた。それに次いでは、吉田沢右衛門、間瀬孫九郎、不破数右衛門の三人が九月二日、矢頭右衛門七も単独にて同じく九月二日、千馬三郎兵衛、間重次郎、中田理平次は同月七日、木村岡右衛門、大高源吾も九月中というように、同志の士は続々江戸へ下つた。しかも大石自身は、後を清くして立つたためには何かと用事もあつて、そうきゆうに京師けいしを引払うわけにも行かない。そこで同志の心を安んずるために、まず倅せがれの主税ちからに老巧間瀬久太夫を介添かいぞえとして、大石瀬左衛門、茅野かやの和助、小野寺幸右衛門なぞとともに、自分に先立つて下向げちやくさせることにした。一行は九月十七日に京都を立つて、同月二十五日には無事江府に下着げちやくした。そして、石町こくちやうの旅人宿りよじんやど小山屋に、江州ごうしゆうの豪家垣見左内公儀に訴訟の筋あつて出府したと称して逗留とうりゆうすることになった。それと見た一党の士気は、こうなればもはや太夫たゆうの出府も間はあるまいというので、いよいよ振いたつた。

これより先^{さき}前原伊助、神崎与五郎^{かんざきよごろう}の両人は、内蔵助の命を帯びて、すでにその年の四月中江戸に下つていた。これは吉良、上杉両家の近^{きんぎよう}情を偵察するためで、内蔵助もそのころから主^{しゆうか}家の再興をしようせんおぼつかなしと見て、そろそろそれに処する道を講じておいたものらしい。で、前原は米屋五兵衛と変^{へんみゆう}名^なして、相生町三丁目到店^{たなが}借りして、吉良邸の偵察に従事するし、神崎は美作屋善兵衛と名^な告つて、上杉の白金の別墅^{べつしよ}にほど近い麻布谷町に一戸を構えた。これは上野介が浪士の復讐を恐れて、実子上杉^{だんじようだ}弾^{だん}正^{せい}大^{だい}彌^{いひつ}綱^{つな}憲^{のり}の別邸^{かく}に匿^{かく}まわれているというような風評^{うわさ}があつたからにほかならない。が、それは風評^{うわさ}だけに止まつて、主として本所の邸に住んでいることが分つたので、おいおい同志が出席してくるころには、与五郎も谷町の店をしまつて、前原の米屋の店へ同居することになつた。そして、美作屋では、自分の生^{しゆうごく}国^{こく}から取つたものだけに、気が指^さしたのか、あらためて小豆屋善兵衛と名告つて、扇子や鬢^{びん}つけの荷を背負^{しよ}いながら、日々吉良邸の内外を窺^{うかが}つた。が、同邸でも見慣れぬ商人と見れば、いっさい邸内へ入れぬようにして、用心堅固に構えている。その中を潜つてはいりこもうとするのだから、こちらの苦心

はひととおりでなかった。が、そんなことにあぐむような彼らでもなかった。日夜その機会を覘ねらつていて、それ火事だ！ とでも言えば、真先に屋根へ駆け上つて、肝心の火事はよそに、向側の吉良邸の動静を目を皿のようにして窺うかがつたものだ。

円山会議の後、真先に江戸へ下つた堀部安兵衛は、浪人劍客長江長左衛門という触れ込みで、米屋の店にほど遠くない林町五丁目に借宅しやくたくした。前哨ぜんしやうたる米屋の店と聯絡れんらを取つて、何かの便宜べんぎを計るためであつたことはいうまでもない。この借宅には、在府の士小山田庄左衛門を始めとして、七月中安兵衛より一足先に江戸へ下つた横川勘平、一足後れてすぐその後から下つてきた、毛利小平太の三人が同居した。そして、横川は三島小一郎、小平太は水原武右衛門と変称した。なお前者は、身分こそ五両三人扶持の徒士かちにすぎなかつたが、主家没落の際には、赤穂城から里余りよの煙硝藏えんしやうに出張して、籠城ろうじやう殉死じゆんしの列れつに漏れたといふので、それと聞かぬや、取る物も取りあえず城下へ駆けつけて、内蔵助うちざうすけの許ところへ吠鳴びなりこんだほどの気鋭の士であつたから、偵察の任務についても人一倍大胆に働いた。小平太も安兵衛だの勘平だのといふ気性の勝つた連中といつしよにいては、一人ぐずぐずしてはいられない。それに同宿の士の中では比較的小身者であつただけに、横川とはことに仲よくしていたので、同じように仲間ちゆうげん小者こものに身を扮やっして、仇家の偵察

にも従事すれば、江戸じゆうを走り廻つて、諸所に散在している同士の間に聯絡れんらくをも取つていた。で、誰一人小平太の心底を疑うものもなければ、彼自身もそれを疑うような心みじんは微塵もなかつた。

ところで、十月の半なかばころまでには、後れて上方を発足した原総右衛門、小野寺十内、間喜兵衛などの領りょう袖しゆう株かぶ老人連も、岡島八十左衛門やそ えもん、貝賀弥左衛門などといつしよに、前後して、江戸へ着いた。最も後れた中村清右衛門、鈴田重八の両人も、十月の三十日には江戸へ入つて、安兵衛の長江長左衛門の借宅に同宿することとなつた。中村は小山田庄左衛門などと同じく百五十石取りの上士で、鈴田は三十石の扶持米を頂いていたものであつた。

頭領大石内蔵助もいよいよ十月の七日には京師けいしを発足した。それに従う面々は、潮田又之丞すがの（前に安兵衛とともに下つて、ふたたび上方へ取つて返したもの）、近松勘六、菅すがの谷半之丞や、早水藤左衛門はやみ、三村次郎左衛門、それに若党仲間どもを加えて、同勢すべて十人、「日野家人垣見五郎兵衛」と大書した絵符を両掛長持ぶに附して、関所関所の眼を眩くらまししながら、五十三駅を押下つた。そして、二十三日には鎌倉雪の下着、ここで江戸から迎へに出た吉田忠左衛門と出会つて、打合せをした上、三日の後いつしよにそこを立つ

た。そして、かねて準備しておかれた川崎在平間村の一屋に入った。ここに十日間ばかり滞在して、江戸の情勢を窺^{うかが}っていたが、差^さ問^{もん}えなしと見て、十一月の五日にはとうとうお膝元へ乗りこんできた。そして、前月来俸主税が逗留している石町の旅人宿小山屋に、左内の伯父と称して宿泊することになった。江戸にあった同志は、それとばかりに、人目を忍んで、かわるがわる内蔵助の許^{ところ}に伺候^{しこう}した。いよいよ年来の宿望を達する日が近づいたのである。

が、内蔵助の到着とともに、かねて連盟の副頭領とも恃^{たの}まれていた千石取りの番頭奥野将^{しょう} 監^{げん}、同じく河村伝兵衛以下六十余人の徒^{とも}輩^{がら}が、いよいよ大石の東下^{とうげ}と聞いて、卑^ひ怯^{きよう}にも誓約^{そむ}に背いて連盟を脱退したことが判明した。もつとも、その中には、前から態度の怪しかったものもあるにはあった。が、内蔵助の叔父小山源五右衛門、従^{じゆう}弟^{てい}進藤源四郎など、義理にも抜^ぬけられない者どもまで、口^{こう}実^{じつ}を設けて同行を肯^{かえ}んじなかつたと聞いては、先着の同志も惘^{あき}れて物^{もの}が言えなかつた。中にも、血氣の横川勘平のごときは、「あいつらもともと汚い奴^{やつ}輩^{ばい}だ。この春討つて捨てようと思つたのに、手延びにして残念だ！」と、齒^は噛^かみをして口惜^{くちやく}しがつた。

が、神崎与五郎はそばからそれを宥^{なだ}めるように、

「なに、今になって退くような奴らは、皆大学様の御左右をうかがって、万一家お取立になつた場合、真先にお見出しに預かろうという了簡りようけんから、心にもない義盟に加わつてきたのだ。そんな奴らが何人いたつて、まさかの時のお役に立つものでない。仇討は吾々だけで十分遣つてみせるよ」と言つた。

勘平もそれには異存がなかつた。

とにかく、一時百二十余名に上つた義徒の連盟も、江戸へ集まつた時には、こうして五十人余りに減つてしまつた。が、それだけにまた後に残つたものの心はいつそう引締つてもきた。少なくとも、人数の減少によつてぐらつくようには見えなかつた。

が、十一月の二十日になつて、麴町こうじまち四丁目千馬三郎兵衛の借宅に、間喜兵衛、同じく重次郎、新六なぞといつしよに同宿していた中田理平次が、夜逃げ同様にしゅつぽん出奔したという知せが同志の間に伝わつた。江戸へ下つた者はまさかだいじょうぶだろうと思つていただけに、同志もこれには吐胸とむねを吐いた。現在同志と思つている者も宛にはならぬというような感情も湧いて、互に相手を疑うような気持にもなつた。中にも、小平太は少なからぬ衝撃しょうげきを受けた。

「そうだ、同志も宛にはならぬ。だが、俺はどうだ、俺は宛になるか」

そう思った時、彼はぎよつとして思わず身を竦めた。彼といえども、最初連盟に加わった時から、一死はもとより覚悟していた。仇家に討入る以上、たといその場で討死しないまでも、公儀の大法に触れて、頭領始め一同の死は免れぬということも知らないではなかつた。が、一方ではまた、仇討は仇討だ、君父の仇を討つたものが、たとい公儀の大法に背けばとて、やみやみ刑死に処せられるはずはない。お上でも忠孝の士を殺したら御政道は立つまいというような考えが、心の底にあつて、それが存外深く根を張っていたらしい。

「だが、相手には何しろ上杉家という後楯がある」と、小平太は今さらのように考えずにはいられなかつた。「その上杉家はまた紀州家を仲にして將軍家とも御縁つづきになつてゐるのだ。去年三月の片手落ちなお裁きから見ても、また今度の大學様の手重い御処分から見ても、吉良家に乱入したものをそのまま助けておかれるはずはない。必定一党の死は極まつた！」

彼は頸の上に振上げられた白刃をまざまざと眼に見るような気がした。同じように感ずればこそ、理兵次も垢を含んで遁亡したものに相違ない。といつて、自分は今さら命惜しさに同志を裏切る気にもなれなければ、またそれだけのあつかましさも持合せていな

い。

「なに、俺一人で死ぬのじゃない」と、彼はしばらくしてようよう乾かっぱしや燥いいだよな声で呟つぶやいた。「死ねば皆いっしょに死ぬのだ！」

こう自分で自分に言つて聞かせてから、何人たれも見えていたものはなかったかと心配するよ
うに、そつと眼を上げてあたりを見廻した。気がついてみると、じつとりと頸筋くびすじのまわ
りに汗を掻いて、自分ながら顔色の蒼醒あおざめているのがよく分つた。

その後も、小平太はできるだけ自分の心の動揺どうようを同志の前に隠すように努つとめた。もつ
とも、彼が同志に心のうちを覚さとられまいとするには、もう一つほかに理由があつた。それ
は彼に一人の情婦おんながあつたからだ。亀井戸天神の境けいだい内で井上源兵衛の娘おしおに出逢つ
て、あわれな身の上話を聞いてからというもの、宿へ帰つてもその女のこと気がなつて、
どうも心が落着かなかつた。で、明るる日はさつそくわずかばかりの手土産を持つて、か
ねて聞いておいた七軒長屋に母親の病気を尋ねてみた。が、行つてみると、聞いたよりは
いっそう惨みじめで、母親は持病の痛風で足腰が立たず、破れた壁に添うて寝かされたまま、
娘が茶店の隙間ひまをみては、駈け戻つて薬餌やくじをすすめたり、大小便の世話までしてくれるの
を待つているというありさまであつた。あまりの気の毒さに、小平太はその後もちよくち

よく見舞いに寄つたが、若い者同志とて、いつしか二人の間に悪縁が結ばれてしまつた。小平太にしてみれば、母娘に対する同情から出たとはいへ、大事を抱えた身の末の遂げないことはよく知つている。悔恨と愛慾とは初めから相闘いだ。が、女の方では、そんなことは知らないから、世にも手頼りない身の盲亀の浮木に逢つた気で、真心籠めて小平太に仕える。小平太もそうされて嬉しくないことはない。同志に隠れて、使走りの廻道をしては、夕方からこそと妙見堂の裏手へはいつて行く。夜分どうしても都合の悪い時は、茶店へ顔を見に行く。そういうおり、彼はいつでも上方における大石の廓通いのことを想いだして、自分で自分に弁解をした。もちろん、頭領がしたから自分も遣つていいというのではない。ただ内蔵助が茶屋酒に酔い痴れながら、片時も仇討のことを忘れなかつたように、自分も女のために一大事を忘れようとは思わない。それだけにしばしの不埒は容赦されたいというのが、せめてもの彼の願ひであつた。そして、暇さえあれば、足は柳島の方へ向つた。

四

ところが、おしおの母親は、十一月の半ばから陽気のせいか、どっと重態じゅうたいになって、娘の精根を尽した介抱も甲斐なく、十日余りも悩みに悩んだあげく、とうとう死んで行つた。おしおは身も浮くばかりに泣いた。そばにいた小平太も、母親がわが身の苦しきも忘れて、息を引取る間ぎわまで、「おしおのことを頼む頼む」と言いつづけにしたことを思うと、何だか目に見えぬ縄なわで縛しばられているような気がして、ぼんやり考えこんでしまった。が、これまでの行きがかりからいつても捨ててはおかれないので、同志の前は大垣の支藩戸田弾正だんじょう介けい氏し成候せいこうの家来で、彼には実兄にあたる山田新左衛門ところの許ところに世話になつている母親の病氣と繕つくろつて、二日ばかり同宿の家を明けて、型ばかりの葬式でも出させるようにした。

で、それがすんでからいつたん宿へ帰つたが、気になるので、一日置いてまた出かけてみた。おしおはもう片時かたときも小平太のそばを離れない。「どんな苦勞でも厭いませぬから、どうかわたしをおそばへ引取つてくださいませ。一人の母にさえ別れては、こうしているのが女の身では心細うてなりませぬ」と、男の膝ひざに縋すがつてかき口説くどいた。

「そう言いやるのもつともじやが、わしも今では他人の家に厄やつかい介かいになつてる身……」
 「では、どうぞあなたがここへ引移つてくださいませ。こんな穢むじい所でお氣の毒ですが、

たとい賃仕事ちんじごとをしてなりとも、わたしはわたしで世過よすぎをして、あなたに御迷惑は懸かけませぬ」と、女の腰はなかなか強い。

これには小平太も当惑した。心の中では、こうしてだんだん身抜きのできない深みへはまってきた自分の愚しさが、何よりもまず悔くいられた。が、今となつてはどうにもしかたがないので、一時遁のがれの気休めに、

「それもそうだが、わしもいつまで浪人をしていてもいい。戸田様に御奉公ごほうこうをしている兄にも頼んで、方々へ渡りがつけてあるから、近いうちには何とか仕官しかんの途みちも着きるかと思つている。その前に内密ないしよでそなたといっしょにしていることが、骨折こっせつてくれた兄にでも知れたら悪い。たとい一合二合の切米きりまいでなりとも、主取りしゅどりさえできたら、きつと願ねがいを出して、表向きそなたを引取るようにするから、それまでのところは、寂さびしからうが、このまま御近所の世話になつてもらいたい。あんまり引つこんでばかりいては、気もくさくさするだろうから、初七日しよなぬかでもすんだらまた茶店へも出るようにしたいが、いい。なに、それも永いことではない。わしも暇さえあれば、ちよくちよく会いに来るからね」と、さまざまに言い捲こしらえて、やつと相手を納得なとくさせた。

で、その日の七つ下さげりに、小平太は屈くつたたく托たくそうな顔をしながら、ぼんやり林町の宿へ戻

つてきた。すると横川勘平が待ち構えていて、相手の顔を見るなり、

「おお水原か、いいところへ戻つてきた。貴公でなくちやできない仕事がある」と、いきなり言いだした。そばには安兵衛の長左衛門も居合せて、何やら事ありげな様子に見えた。「何だ何だ？」と、小平太も心のうちを見透みすかされまいと思うから、わざと威勢よく二人のそばへ顔を寄せて行つた。

「じつはあの両国の橋の袂たもとにいる茶坊主ちんさい珍斎ちんさいな」と、勘平は声を潜ひそめてつぶけた。「あいつはいつかも話したとおり例の山田宗そうへん徧べんの弟子で、やはりト一ぼく（上野介の符牒ふちよう）の邸へ出入りをしている、茶会さかいでもある時は、師匠ととものお供ともをして行つて、いろいろ手伝いもしているという話だから、またなにか聞きだすこともあろうかと、この間からそれとなく取入つておいたがね、今日はからずそいつの手からト一の家老小林平八郎に宛てた書面を手に入れたんだよ」

「ふむふむ！」

「つい今の先のことだ、ぶらりとはいって行くと、これはいいところへ来てくれた、また一筆頼むと言うじやないか。なに、この坊主がお茶はできるかしらんが、無類の悪筆でね。これまでも二三度頼まれたことがあるから、おやすい御用と引請ひきうけて、さて宛名はと聞い

てみると、小林だ。しめた！ とは思ったが、色にも出さず、相手の言うままに認め^{したた}た上、自分もあちらの方面に所用があるから、何なら私が届けて進ぜましよう、御返事があるようならまた房路^{もどり}にと、うまく言つて使者^{つかい}まで請合つてきた。それはいいが、何しろ俺はこの前あの邸へはいりこんで、うろろろしているとところを掴^{つか}みだされた覚えがあるから、二度とあそこへは行かれない。と言つて、長左衛門のでは顔が売れているから、どうも目に立つし、気はせきながらも、貴公の帰りを待つていたのだ」

「そうか」と、小平太はぐつと固唾^{かたず}を呑み下しながら言った。「よし、それでは俺が引請けた」

「うむ、しつかり遣^やつてくれ」

「心得た。で、念のために聞いておくが、この手紙の用件は？」

「いや、それは何でもない。かねて小林から頼まれていた品が見つかった。いずれ近日持主同道で持参するからよろしくというだけだ。いずれ茶器か何かのことだろうよ。だが、貴公は何にも知らない体^{てい}で、ただ使者^{つかい}に來たようにしておいた方がいい」

「それもそうだな」

「とにかく、またと得られない機会だ」と、勘平はさらに自分の注文をつづけた。「でき

るだけ邸内の様子を細かに見てきてもらいたい。近ごろ長屋と母屋おもやとの間に大竹の矢来を
 結ゆい廻して、たとい長屋の方へ打入れられても、母屋へは寄りつかれないようにしてあると
 いう噂うわさも聞くが、このごろはあちらでもお出入り以外の物売はいつさい入れないようにし
 ているから、最近の様子はさっぱり分らない。そのへんも十分見届けてきてもらいたいな」
 「それに」と、安兵衛もそばから言葉を添えた。「かねがね山田宗徧のところへ弟子入り
 をしている脇屋氏わきやうじ（大高源吾のこと、京都の富商脇屋新兵衛と称して入りこむ）から、
 吉良邸では来月の六日に年忘れの茶会があるという内報もあった。すれば、五日の夜は必ひ
 定つじょう 上野介在宿に極きわまったというので、討入はおおよそその夜のことになるらしい大石
 殿の口ぶりでもあった。だが、頭領としては、その前にもう一度邸内の防備の有無を見定
 めておきたいと言われるのだ。で、もしお手前の働きでそのへんの事情が確実に分つたら、
 吾々が待ちに待った日もいよいよ近づいたというものだ。大切だいじな役目だ、しっかり遣つて
 きてもらいたい」
 「心得ました」と、小平太はそれを聞いて、きゆうに胸をどきつかせながらも、きつぱり
 返辞をした。

「くれぐれも仕損じのないようにな」と、安兵衛はなお念を押すように言った。「この場

になつてしくじつたら、それこそ大事去るだ！ その心得で遣つてきてもらいたい」

「よく分つております」と、小平太も緊張にやや蒼味を帯びた顔を上げて言った。「万一見咎められるようなことがありましようとも、一命に懸けて御一同の難儀になるようなこととはいたしませぬ」

「その覚悟で行けば、しくじることもあるまい。だが、見破られないうちに、こちらの思う所を見てくるのが肝心だ。くだいようじゃが、その心得でな」

「畏承りました」

小平太はすぐに身支度をして、例の状箱を受取つて立ち上つた。何と思つたか、勘平も後から追い継すがるように送つてで、

「長左衛門どのの言われるとおり、向うの様子がもう少し知れないと、迂濶うかつに手は出せないという頭領始め領袖りょうしゅう方がたの御意見だ。しっかり遣つてきてくれ」と、皮肉らしく小聲でささやいた。「その代りに、うまく行つたら当夜の一番槍にも優る功名だぞ」

「うむ！」とうなずいたまま、小平太は黙つて表へ飛びだした。

小平太が進んでこの危い役割を引請けたのは、一つは心のうちを見透されまいとする虚勢よせいからでもあつたが、一つにはまた、ここで一番自分の働きぶりを見せて、中田理平次などとはまるで違つた人間だということ同志の前にはつきり証拠立てておきたかつたからでもあつた。いや、同志の前というよりは、第一自分の前に証拠立てたかつた。だつて、小平太の心を疑つているものは、何人だれよりもまず彼自身であつたから！　そこで彼は与えられた機会を、よく考えてもみないで、しやにむに掴つかんでしまった。が、一党に対する責任を思えば、安兵衛から注意されるまでもなく、この任務はあまりにも重かつた。もし怪しい奴と睨にらまれて、町奉行の手にでも引渡されたら……そして、どうしても密事を吐かねばならぬような嵌目はめに陥おちつたら……

「そんなことにでもなれば、俺一人ではない、一党の破滅だ！」と、考えただけでも足の竦すくむような気がして、彼は思わず街まちの上に突立つてしまった。

が、それとともに、「一命に懸けても」と二人の前に誓つた言葉が彼の心に泛うかんできた。「そうだ」と、彼はふたたび自分で自分に誓うように呟つぶやいた。「どんなことになろうとも、俺はこの口を開けてはならない。——責めらりようが、殺さりようが、たとい舌を咬くい切

つてでも！」

こんな烈しい言葉を用いながらも、彼はそれによって、不思議に、何の衝撃をも、不安をも、恐怖をも感じなかった。この場合、彼には命を投げだすということがきわめて訳もないことのように思われたのである。

「なに、死ぬ気でかかったら、何ほどの事があるう？ こちらの覚悟一つだ！」

彼は力^{ちから}足^{あし}を踏^ふみ緊^しめるようにして歩きだした。見ると、もう吉良家の裏門に近く来ている。かねて小豆屋善兵衛の探知によって、家老小林の宅が裏門に近い所にあると聞いていた。が、それでは都合が悪いと思つたか、わざと表門へ廻つて、門番にかかった。

「お願いでございます、ちよつと小林様のお長屋へ通らせていただきます」

「小林様へ通るはいいが、いずれから参つた？」と、暇^{ひま}潰^{つぶ}しに綱^{つな}すきをしていた門番が面倒臭^{めんどうくさ}そうに聞き返した。

「へえ、両国橋のお茶道珍齋からお状箱を持ってまいりました」

「そうか、よし通れ！」

小平太はまず虎口^{ここう}を免^{のが}れたような気がした。が、ここでひとつ落着いたところを見せておこうと、

「私わたくしは新参者でよく存じませぬが、小林様のお長屋はどちらでございましょう？」と訊いてみた。

「なに、初めて御当家へ参つたと申すか」と、足輕はやつと手に持った綱から顔を上げた。「小林様はお玄関の前を左に折れて、中の塀についてお長屋の前を真直に行くと、一番奥の一軒建ちがそれだ」

「へえ、どうもありがとうございます。こちらへ参りますか、は、分りました」と、お叩ひ頭ぎをしいしい、わざとゆつくり足を運んで、遠目に玄関口を覗のぞいてみると、正面に舞樂ぶがくの絵をかいた大きな衝ついたて立たてが立ててあるばかりで、ひっそり閑しずまり返っていた。が、こちらで見咎みとがめられてはならぬと思うから、言われたとおりに、すぐに左へ折れて、総長屋の前をぶらりぶらりと歩いて行つた。長屋にはところどころ人声がして、どこからともなく水を汲む音、夕餉ゆうげの支度をするらしい物音が聞えてきた。が、どちらを見ても、別段目めに立つような異状はない。大竹の矢来といったような嚴重な設備は、少なくともそのへんには見受けられなかつた。

彼はその間も始終右手の塀に目を着けていた。腰から下が羽目板になって、上に小屋根のついたもので、その中が座敷のお庭先にでもなっているらしい。ところどころ風通しの

櫺子窓もついているが、一つ一つ内側から簾が下げてあるので、中の様子は見られない。爪先立ちをしてみても、植込の間から母屋の屋根つづきが、それもほんの少々窺われるばかりだ。

そのうちに、ふと一枚戸の中門が眼にとまった。ぴたりと閉めきつてあるので、そのまま行き過ぎようとしたが、念のためだと二三歩後戻りをして、前後を見廻しながら、そつとその扉に手を懸けようとした。とたんに、行手の土蔵の蔭から声高な話声が聞えてきたので、小平太はぎよつとして飛び退いた。見ると、二人連れの侍が何やら話しながら、すぐ目の前へ遣つてくるのだ。彼はすかさず、

「少々物をお訊ね申しますが」と、小腰を屈めながら言った。「小林様のお長屋はどちらでございましょうか」

二人は立ち留つて、じろじろ小平太の様子を眺めていたが、年嵩の方が、「なに小林様？ 御家老のお長屋はついその左手のお家がそうだ」と、顔をしゃくつて教えてくれた。

「へえ、ありがとうございます、まことに相すみませぬ」と、ぴよこぴよこ頭を下げながら、急いでその家のくぐり戸に手を懸けた。

二人の侍も小平太が門をはいるまでじつと後を見送っていたが、仲間体ではあるし、状箱は持つている、別に胡乱うろうんとも思わなかったか、そのまま踵きびすを返して行ってしまった。

小平太はくぐり戸を閉めて、始めてほつと胸を撫なで下ろした。一步違いで無事にすんだけれども、考えてみれば、實際危かった。剣けん呑のん剣けん呑のん！ と思ひながら、気を取りなおして、すぐ前の玄関にかかった。そして、

「お頼もうします、お頼もうします」と、二度ばかり声を懸けた。

「どうれ！」とどすがかった声が出て、すぐ隣の玄関脇の部屋から、小倉こくらの袴はかまを穿はいた爺さんが出てきた。

小平太はいきなり二つ三つ頭を下げて、

「私はお茶道珍齋ふぼしからこの文箱ふぼしを持ってまいりました。どうかお取次ぎを願います」と、手に持った状箱を差出した。

取次の爺さんは黙ってそれを受取って、朱塗りの蓋ふたの上に書いた宛名あてなの文字をつくづく眺めていたが、「ちよつと待て」と言い捨てたまま、奥へはいった。が、間もなく引返してきて、「すぐ御返事があるそうだから、しばらく待っておれ」と伝えた。そして、自分はずぐに元の部屋へはいつてしまった。

小平太はしばらくそこに立っていたが、だいぶ手間が取れるらしく、奥からは何の沙汰さたもない。この間だ！ この間にそこらを見廻つてやれとも思ったが、さっきの失敗に懲りこているので、もし自分のいない間に出てこれられでもして、申し開きが立たなかつたら、それこそ百年目だ！ なに、まだ帰途かえりみちもあることだと、じつと辛抱しんぼうしているうちに、やつと奥で手の鳴る音がした。それを聞くと、例の爺さんはそそくさと襖ふすまを明けてはいつて行つたが、すぐにまた取つて返して、

「待ち遠であつたな。この中に御返事が入っているそうだ。よろしくと伝えてくりやれ」と、小平太の持つてきた状箱を渡した。

「畏かしこま承りましてございます。そのほかにお言伝ではござりませぬか」

「うむ、これを持つてまいれば分るそうだ」

「さようでございますか、どうもお邪魔いたしました」と、小平太はお叩頭しげをして、そのまま表へ出た。

さあ、これからはもう帰るばかりだ。が、これだけではせつかく来た甲斐がないような気もした。第一、同志の連中が何と云うか知れない。彼には何よりも同志の思わくが気になつた。で、右へ行けば表門へ出るのを、わざと左へ取つて、角の土蔵について廻つてみ

た。すると、もうそこに裏門が見えて、その正面にあたる所が裏口の小玄関にでもなっているらしい。それが眼に着くと、彼はすぐに踵きびすを旋かえした。そちらの方面のことは、前原や神崎の手でおおよそ分っていたからである。

で、元来た道を引返していると、ふたたび例の中門が眼にとまった。見ると、前にはびたりと閉めきつてあつた戸が、どうしたのやら一寸ばかり透すいている。想うに、さつき逢つた侍がここからはいつて、つい閉め残したものでもあるらしい。小平太は天の与えとばかりに胸を躍おどらせた。が、遽あわてるところではないと、前後を見廻して、人目のないのを見定めながら、つと扉とに身を寄せて、その隙間から覗のぞきこんだ。目の前はやつぱりお庭先の植込らしく、木の枝に視線は遮さえぎられるが、それでも廻縁になつた廊下が長くつづいて、閉たてきつた障しょうじ子にあかあかと夕日の射しているさまが、手に取るように窺うかがわれた。上野介の居間がどのへんにあるかは、もとより知る由もない。が、左手に見える檜ひがき垣の蔭には泉水でもあるらしく、ぼちやんと鯉の跳ねる音も聞えてきた。小平太はだんだん大胆になつて、少しずつ門の扉とびらを開けて行つた。もう少して頭だけ入りそうになつた時、すうと向うに見える障子が明いて、天てん目もくを持つた若い女が縁側にあらわれた。彼はぎくりとして思わず後へ退つた。が、間あいが離れているので、向うでは氣のつくはずもない。そのまま廊下

づたいに、音もなく下手へはいつて行く。

小平太は振返つて、用心深くあたりを見廻した。幸いに、どこから見てもいられた様子もない。この上危い思いをして覗いていても得るところはあるまい、ここらが見切り時だと、彼は急いで門を離れた。が、せめて長屋の戸前でも数えて行つてやれと、心の中でそれを読みながら歩いていくうちに、不意に背後で「わあッ！」という声がして、五六人の子供が彼のそばをばたばたと駈けだして行つた。一人の吹矢を持った男の子の後から、大勢がいつしよになつて駈けだして行くのだ。彼はまた胆を潰した。が、それと分ると、まあ、あそこにぐずぐずしていかないで、いい塩梅だと思つた。そのうちにとうとう表門まで来てしまつた。で、

「どうもありがとうございます、行つて参りました」と、もう一度門番に挨拶をして、街の上へ出た。

六

小平太は一丁ばかり来て、始めて吾に返つたように息を吐いた。別段取りたてて吹

聴^うするようなこともないが、使命だけは無事に果した。これだけ見てくれば、同志の前に面目の立たぬようなこともあるまい。そう思つて、彼はまた駈^かけだすようにして林町の宿へ歸つた。宿には安兵衛、勘平の兩人はいうまでもなく、吉田忠左衛門の田口一真まで来合せて、彼の歸宅^{かえり}を待つていた。気早の勘平は、足音を聞くや、縁先まで駈^かけだしてきて、

「おお歸つてきたな、首尾^{しゆび}はどうだった？」と、いきなり訊^{たず}ねた。

「うむ！」と言つたまま、小平太はもう一度振返つて、後を跟^つけるものの有無^{うむ}を見定めてから、始めて座敷へ上つた。

奥の座敷には、忠左衛門と安兵衛の二人がひそひそと対談していた。小平太はまず忠左衛門に一礼して、さて安兵衛と勘平の前に持つて歸つた状箱を差出した。

「ふむ、これが返事だな」と、安兵衛は手に取つて、ちよつとその上書に眼をやつたが、すぐにまたそれを下に置いて訊ねた。「して、邸^{やしき}の様子は存分に見てこられたか」

「あらまし見てまいりました」

こう前置をして、小平太は指先で畳の上に図を描いてみせながら、はいつて行つた時から出てくるまでの顛末^{てんまつ}を仔細に述べはじめた。勘平はそばから硯^{すずり}に料紙を取つて渡した。

で、それによつて、ふたたび見取り図を描いて説明しながら、

「まずこういつたあんばいでございます」と、話しを結んだ。「私の見たところでは、思いのほかに薄手な屋敷で、長屋にも母屋にも、噂に聞いた竹矢来なぞいっこう見当りませんでした。間々女子供ままの声は聞えましたが、いつたいにひっそりとして、格別の手配りがあるろうとも思われず、風説はただ風説にすぎないかと存ぜられました」

「なるほど」と、忠左衛門は大きくうなずいた。「だいたいわれらが考えていたとおりであるな」

「さようでございます」と、小平太はさらに語を継いだ。「で、戻路もどりにはせめてもと存じまして、長屋の位置を見がてら、その家紋を読んでまいりましたが、だいたい表通りに向つた一棟ひとむねと、南側に添うた一棟と、総長屋は二棟に別れておりまして、戸前の数は三十あまり四十戸前もございましょうか。そのほかに家老小林の住宅すまいは、別に一軒建ちになつておりました」

「いや、よく気がつかれた」と、忠左衛門は相手の労を犒ねぎやううように言った。「これで邸内の防備に対するだいたいの見当もついた上に、当夜出会いそうな相手方の人数もほぼ分つたというものだ。太夫たゆうに申しあげたら、さぞ喜ばれるじやろう。小平太どの、大儀でござ

つたな」

「ついては、横川、お身ひとつその文箱を茶坊主の許へとどけてくれんか」と、安兵衛はそばから口を出した。「これは貴公でないといかんからな」

「心得ました。さつそくとどけることにいたしましょう」

「そうだ」と、忠左衛門も言った。「御苦労だが、そう願うことにしよう。ところで、小平太どのの内偵は、拙者から久右衛門殿（池田久右衛門、山科以来大石の変名）に伝えようが、それよりもお身自身の口から申しあげた方がいいかもしれない。どうだな、これからすぐに石町へ同行しては？」

「は、私が参つた方がよろしければ、すぐに御同道いたします」

「ああ、そうなさい。それから横川氏、貴公もその文箱をとどけたら、あちらへ参られい。このたびのことは、一つはお手前の働きでもあるから、一足先へ行つて、拙者から太夫によく申しあげておくよ」

「恐れ入りました。それでは、いづれ後ほど御意を得ることにしまして、私は一走り行つてまいります」と、勘平は会釈して立ち上つた。ちよつと間を置いて、忠左衛門も小平太を伴つてその家を出た。

二人が小山屋の隠宅へ着いたのは、日脚の短い時節とて、もうそろそろ灯火あかりの点くころであった。寒がりの内蔵助は、上かみの間の行灯あんどんの影に、火桶を前にして、一人物案じ顔に坐っていた。で、まず忠左衛門から口を切つて、小平太が今日吉良邸へ入りこむようになった次第を紹介した。その尾について小平太も、自分が見てきた邸内の様子を落ちなく報告に及んだ。内蔵助は眼を瞑つぶつたまま、じつとそれに聴き入っていたが、やがて相手の言葉が途切れるのを待つて、

「ふむ、そう分つてみれば、もはや遅疑ちぎする場合にはないな」と、ぽつつり口を開いた。

「さよう！」と、忠左衛門はすぐにそれに応じた。「六日の茶会さかいを外したら、悔くいて及ばぬことにもなりましょう。それがすめば、さつそく白金しろかねの上杉家の別邸へ引移られるはずだと、たしかな筋から聞き及んでもいますからな」

「それもある」と言つたまま、内蔵助はまたしばらく眼を瞑っていた。が、ふたたび口を開いた時は、持前の低声ではあるが、いつになく底力が籠っていた。「で、いよいよそれと決定すれば、あらためて一同にも通告するが、面々においてもその心得で、それぞれその用意をして待つているように伝えてもらいたい。それにしても、小平太、今日は御苦労であつたな。内蔵助からも厚く礼を言うぞ」

「は、ありがとう存じます」と、小平太は畳に手を突いたまま、きゆうに眼の中が熱くなるような気がした。彼としては太夫の前へ出て、自分で報告するさえおもは面晴れであるのに、こんな言葉まで懸けられようとは、ゆめにも思い設けなかつたのである。

彼はそれから次の間へ下って、同宿の諸士といっしよに夕飯の御馳走になった上、後から来た横川と連れだつて、上々の首尾でその宿を辞した。

で、二人並んで歩きながら、小平太は相手から話しかけられても、すぐには返辞をしないほど、深く考えこんでしまった。第一には、自分の小さな手柄が太夫に認められたのも嬉しかつた。が、そればかりではなかつた。太夫に認められたことによつて、ともすれば動揺どうようしやすい自分の心が、何かこう支柱つっぱりでもかわれたように、しゃんとしてきた。それが彼には何よりも嬉しかつたのだ。

「そうだ、ああ言つてもらえば、俺にも死ぬる、立派に死んでみせられる！」と、彼は何度も心のうちで繰返した。

横川は横川で、延びに延びた討入の日取りがいよいよ決定したというので、妙に昂奮こうふんして、うきうきしていた。で、何かと小平太に話しかけるのだが相手は上の空で、いっこう手応てごたえがない。

「おい水原、最前から貴公は何を考えているんだ？」と、勘平はたまりかねて相手の肩を叩いた。

「俺？ 俺は……俺はそうだ、太夫のありがたいお言葉を考えていたのだ」

「そうか」と、勘平もうなずいた。「昼行灯ひるあんどんの何のと悪く言うものの、やっぱり太夫は偉いところがあるね。時には何となく生温いように思って、俺なぞずいぶん喰ってかかったものだが、別に怒ったような顔もされない。いくらこちらがいきりたつていても、一言ひとことあの仁じんから優しい言葉を懸けられると、すぐにまたころりとまいって、やっぱりこの人の下に死にたいと思うからね。人柄というか、何というか、あれが持つて生れた人徳にんとくだろうな」

「うむ、だがしかし、ああいうお言葉を頂戴するにつけて、俺は貴公にすまないような気がする。これも貴公が手柄を俺に譲ってくれたおかげだからな」

「なに、そんなことはお互いだ」と、勘平は快活に笑った。「それに手柄を譲るも譲らないも、俺にはあの邸へはいれなかつたんだからな。貴公の働きは貴公の働きだよ」

「いや、そうでない」と、小平太はあくまでまじめであった。「俺は貴公のおかげで救われた。この恩は忘れない、死んでも忘れない！」

彼はいきなり勘平の腕を掴んだまま、つづけざまに頭を下げた。その眼には涙が光っていた。勘平は妙な気はしたが、相手がまじめなだけに、黯然あんぜんとしてそれを見守っていた。こうして二人は長い間両国の橋の上に立っていた。

七

いよいよ討入は十二月五日の夜と決定して、その旨頭領大石からそれぞれ通達された。一同は一種の昂奮こうふんをもってそれを受取った。五日といえ、あますところ日もない。とうとう年来の宿望を遂げる日がやってきたのだ。それとともに、生きてふたたびこの娑婆しゃばへ出てこれようとも思われない。で、それとは言わぬが、めいめいその覚悟をして、故國こくにの親類縁者へ手紙を出すものは出す、また江戸に親兄弟のあるものは、それぞれ訪ねて行って、それとなく訣別わかれを告げるといように、一党の気はいはどことなく騒さわだつてきた。十一月も晦日みそかのことであつた。小平太は朝から小石川の茗荷谷みょうがだににある戸田侯のお長屋に兄の山田新左衛門を訪ねて行つた。おりよく兄も非番で在宿していた。久しぶりに来たというので、母親も喜んで、二人の前に手打ち蕎麦そばを出してくれた。で、しばらくよもや

まの話しをしていたが、小平太はおりを見て、

「時に兄上」と切りだした。「永い間こちらへもいろいろ御迷惑を懸けましたが、今度西国筋のさる御大身のお供をして、もう一度上方へ上ることになりました。で、今日はその暇いとまご乞こいかたがた参上したような次第でございます」

「ほほう、それは重ちゆうじゆう畳」と、兄は何も気がつかぬように言った。「わしもお前のためには、これまで縁辺をたよつて、ずいぶん方々へ頼んではおいたが、どうも思うに任せぬ。そういうことになれば、誠にけつこうな次第だ。で、今度の御主人というのはやはり御直参でもあるのかな」

「いえ、それが」と、小平太はちよつと口籠くちごもった。「御陪身ごばいしんではござりますが、さる西国大名の御家老格……私としては、もはや主人の選り好みはしていられませぬ」

「それはそうだ。武士としては、主人を失つて浪人しているくらい惨めなものはない。主し取りゆうとりさえできれば、何よりけつこうだ。時にお前は」と、新左衛門は何やら想いだしたように言い添えた。「去年の暮にも、元浅野家の城代家老大石殿のお供をして、上方へ上つたが、あの方はまだ山科とやらにおいでかな」

「大石様でございますか」

「うん、その大石殿さ」と、新左衛門はじつと弟の顔を見詰めながらつぶけた。「じつはその大石殿が、何やら思いたつことがあって、近ごろ江戸に下られたという噂を耳にした。いや、大石殿ばかりではない、旧浅野家の浪人どももおいおい江戸に参着して、何やら不穩ふおんなことを企たくらんでいるという風説もある。もつとも、風説にすぎぬかもしれないが、去年以来の成なり行ゆきを思えば、全然風説のようなことがないとも言われない。お前はどうか？ かねて上方かみがたではだいぶ大石殿のお世話になったというが、まさかお前がその一味に加担しているようなことはあるまいな」

「はッ」と言つたまま、小平太はちよつと顔が上げられなかった。

「じつはその風説を耳にしてから、ぜび一度お前に会つて訊きいてみようと思つていたところだ。今聞けば、さる西国筋の御しゅ身に主しゅ取りをしたと言いながら、わしにその名を明あそうともしない。で、万一お前がそういう企たくらてに加担していたとしたら、兄弟のわしには包まず明あすがいいぞ」

小平太はふたたび「はッ」と言つたまま、頸筋うなじを垂れて、じつと考えこんでしまった。そこまで知つていられては、もう是非ぜひがない。それに、そういう風説を耳にしながら、今日まで黙つていたところを見れば、兄もこのたびの一挙にまんざら同情がないわけでもあ

るまい。まして戸田家と浅野家とは御親類の間柄だ。ここで俺が戸田家の家来たる兄に有様りようを打明けてみたところで、別段差障さしさわりの生ずるようなこともあるまい。このたびの事は、親兄弟たりともいつさい漏もらすまいという誓約はある。しかも、その誓約はけつして正確に守られていないとすれば、俺一人頑固にそれを守り通してみたところで、何になろう？ それよりも、ここで打明けて、兄の同情と支援とが得られたら、自分としてもどのくらい心強いかしれない。心強いばかりでなく、同情を寄せていくくれる兄の手前としても、俺は後へ退けなくなるではないか。そうだ、それが何より肝心だと心に思案して、「で、もし私がその企てを知っているとしましたら？」と、上眼に兄の顔を見上げながら、おずおず言ってみた。

「知っているとすれば、お前は一味に加担しているのだな！」と、新左衛門の声は思わず筒拔つつぬけた。

「はい、加担しております」と、小平太も度胸を定めて言いきった。「主家の没落に遇あつて武士の意気地いきじを立てるには、そのほかに道もおざりませぬ。兄上、お察しくだされい」「ふむ、それは困ったことになったな」と、新左衛門は両腕こまぬを拱こまぬいたまま、溜息ためいきを吐いた。

「何とおおせられます？」と、小平太も顔色を変えた。「では、兄上は大石殿の一挙に不同意じゃとおおせられるか」

「ずんと不同意じゃ」と、新左衛門は相手の眼を見返したまま言った。「考えてもみい、今の浅野の浪人どもがそのような暴挙に出て、お膝ひざもと二元を騒さわがしたら、戸田のお家はどうかと思う？ 去年こぞ内匠たくみのかみさま頭にんじょう様よう刃傷やんがうの際ときにも、大垣の宗家そうけを始め、わが君侯にも連座れんざのお咎とがめとして、蝥居ちつきよ閉門へいもんをおおせつけられたではないか。今度そんなことがあれば、お家の興こう廢はいにも係かかわる一大事じゃ。お前にはそれが分らぬか」

そう言われてみると、小平太には何と返す言葉もなかった。で、しばらく俯向うつむいたまま無言をつづけていたが、ややあつて、

「では、兄上は、私に武士の道を捨てよとおっしゃるか」と、心外らしく聞き返した。

「そうだ、捨ててもらおうほかないな」と、新左衛門は言いきった。「いや、お前の心中は察さしている。兄としても、お前に武士の道を立てさせたい。しかし、わしにはわしの主君がある。主君の大事になると知つて、お前をこのままにはしておかれぬぞ」

「とおっしゃるが、かりに私が退くとしましても、大石殿始め一味の徒党とくだうが吉良殿の邸しやうへ打入うちいつたとしたら、どうなされます？」

「大石殿のことまでは、われら風情には力及ばぬ。ただ兄として弟がそんな大事に加担するのを見てはおられぬと申すのじゃ」

「で、もし私がどうしても脱退せぬと申しましたら？」

「このまま引つたてて、当家の御重役に訴えでるまでじゃ」

こう言つて、新左衛門はすぐにも立ち上りそうな氣勢を見せた。

「ま、お待ちください、しばらくお待ちください」と、小平太は慌てて押留めた。ひよんなことを言いだしたばかりに、とんだことになってしまったとは思つたが、どうにかたがえない。とにかく、ここは兄の言葉に従つたふりをして、この場を納めるほかないと思つたので、

「なるほど分りました」と、下を向いたまま言いだした。「一時の血気に速つて、兄上の御迷惑になるとも知らず、一味に加担しましたのは、重々私の心得違いでした。では、お言葉に従つて、大石殿始め同志の方々には相すみませぬが、誓約を破つて脱退することにいたしましょう」

「しかとその気か」

「何しに虚偽を申しましょう？ 私とてもしいて命を捨てとうはござりませぬ。その代

りには、兄上、大石殿始め一党のことはどうぞ御内分にしてくださりませ」

「うむ、お前がそう心を改めた上は、わしも好んであの方々の邪魔をしようとは思わぬ。

御一統の企てについては、ほかから漏れたら知らぬこと、わしからは金輪際こんりんざい口外こうがいすまい。それだけは固く約束しておくよ」

「どうかそのようにお願いいたします」

「しかし、お前としても今の言葉はどこまでも守ってくれねばならぬぞ」と、新左衛門はあらためて念を押すように言った。「お前が浪人した上に、二人揃そろって扶持ふちに離れるようなことがあつてはならぬからな——ま、これはここだけの話しじゃけれど」

小平太は黙つて相手の顔を見返した。

「俺たちには年を取つた母親もある」と、新左衛門は気が指したのか言いなおした。「わしにも大切だいじな阿母おかあさんなら、お前にとつても一人の母親だ。この老母を路頭に迷わせるようなことがあつてはならぬからな」

「ごもつともでございます」と、小平太も母親のことを言われた時は一ばん身に染みだ。

「ただこれまで事をもにしてきた関係上、にわかには同志に背を向けるようなこともいたしかねますが、近々のうちには機を見て身を引くことにして、けつして兄上と番つがえた言葉

は違えませぬから、その段はどうぞ御安心ください」

「それでやつと安心した。なに、お前の立場の苦しいことは、わしも察している。ただくれぐれもその言葉を違えまいぞ」

小平太は唯々として頭を下げた。それから二三話しもしていたが、長居は無用と思つたので、いずれそのうちまた出なおしてくるからと言いおいたまま、そこそこにその家を出てしまった。

街の上へ出た時、彼は自分で自分が分らなくなるほど顛動していた。彼が予期したことはまるで反対の結果になった。兄に打明けて、兄から同情と激励の言葉でも受けようと思つていたのに、かえつてこちらの勇気を挫かれたばかりか、あんな一時遁れの嘘まで吐かなければならぬ嵌目に陥つてしまった。といつて、それを幸いに、その嘘を真実にしようなぞという気はもうとう起らなかつた。彼にはあまりにも自己本位な兄の性根がありありと見え透いていた。

「そうだ、兄が本当に主家を憂うる真心から、ああ言つて俺に迫つたのなら、俺はこのまま兄の言うことを聞いて、同志を裏切るような気になつたかもしれない。危殆い、本当に危殆いところだつた」

そう思いながらも、いつこうその兄に対する反撥心はんぱつしんの起らぬのが、自分でも不思議でならなかった。彼は心のうちのどこかで兄を是認ぜにんしていた。しかも、それを突詰めてみることは、彼には怖ろしかった。

彼はただ何とも言われない侘わびしさと寂寥せきりょうとを感じて、とぼとぼと街の上を歩いていった。

八

林町の宿へ戻った時は、まだ日が高かった。同宿の者はたいてい出払って、一人小山田庄左衛門が人待ち顔にぼんやり居残っていた。そして、

「おお水原か、どこへ行ってこられた？」と声を懸けた。

「は」と言つたものの、小平太には兄の許ところへと実を言うのが何となく心苦しかった。で、「ちよつと知人の許もとへ」と、その場をごまかしておいて、

「それにしても、あなたは江戸に親御もあれば、御縁者も多いはず、どうしてそちらへお出かけにはなりませんか」と反問してみた。

「なに、この期に及んで縁故のものをたずねても、何にもならぬからな」と、庄左衛門はわざと快活に笑ってみせた。

「でも、お父上一閑様は寄るお年波でもあり、さぞあなたを待ち侘びていられますよう」

「なに、あの親爺が」と、庄左衛門はそれでも寂しそうに言った。「あれは御承知のおりの一剋者いっごくもの、わたしが会いになぞ行こうものなら、今ごろ何しに来た？ 主君の仇も討たないうちに、何用あつて親になぞ会いに来た？ と、頭から呶鳴りどなつけますわい。先ごろちよつと立ち寄つた時にも、いかい不興な顔をしましてな、もう来ても、二度とは顔を見せぬと叩きだすように追い返しました。八十を越した年寄とて、気にかからんでもないが、そんな訳で遠慮しておりますのじや」

「それはそれは」と言つたまま、小平太は自分の兄に引較べて、ちよつと返辞ができなかつた。「なるほど、お父上の気性ならそうもありましょう。立派な父御を持たれてお羨ましいうらやしい」

実際、彼は羨ましかつた。そういう父親を持つていたら、自分も今になつてこんな心の動くこともあるまい。それにつけても、何と思つて兄になぞ大事を打明けたかと、今さらのように自分の不覚を悔くやまずにはいられなかつた。

二人がそうしているところへ、表から足音荒く横川勘平がはいつてきた。そして、ぶん腹を立てながら、

「おい、また裏切者が出たぞ！」といきなり喚よばわった。

「裏切者？」と二人はいっせいに相手を見上げた。

「そうだ、裏切者が出た、しかもこの宿から出たのだ！」

小平太はぎくりとして思わず飛び上った。何だか自分が今兄としてきた相談のいちぶしじゆ一伍一什うをそのまま勘平に聞いていられたような気がしたのである。

「中村と鈴田の二人が朝から出て行つた」と、勘平は委細かまわず続けた。「俺はどうもその出方が怪しいと思つたので、君らが出かけた後で、そつとその行李こつりを調べてみると、いつ持ちだしたもののやら、何一つ残つていないではないか。それには慚あきれたね。が、捨ておかれぬと思つたから、すぐに頭領ところの許ところへ駈かけつけてみた。すると、どうだ、太夫はもうちゃんと二人のことを知つていて、『どうも是非ぜひにおよばぬ』と言つていられるのだよ。

聞いてみると、あいつらはもう書面でもって脱退の旨を届けてきたんだそうなの。その文句がいいね。『自分ども存じ寄りの儀があつて、今日限り同盟を退く。かねがね御懇情ごこんじやうを蒙こうむつたが、年取つた親もあることとて、どうも思召しどおりになるわけに行かない。よつ

て自分どもは自分どもで一存を立てるつもりだから、どうぞ連判状から抜いてくれ』とあるんだとよ。奴らも今になってそんな卑怯ひきしょうなことを言いだすくらいなら、何と思つてはるばる江戸まで下つてきたのだ？ 俺にはその了りようけん簡かんが分らないね」

「さあ」と言つたまま、小平太にはやつぱり返辞がでなかつた。黙つて聞いていると、何だか自分が罵ののられてゐるようにも思われた。

「たぶん江戸へ来れば、何かよいことでもあるように思つてきたんだろうが」と、勘平はまだ余憤よふんが去らないように、一人でつづけた。「それが、そんな話がないばかりか、討うちい入いりの日取りまで極つたといふので、吃驚びっくりして腰を抜かしたんだろうよ」

「まさかそうでもあるまい」と、小平太はようよう口を挾んだ。「円山会議でいよいよ仇討と決した時、太夫から諸士へ廻された廻状にも、ちゃんとそれは明記してあつたからな」
「それが慾目で分らなかつたのさ」と勘平は捨ててやるように言つて、からからと笑つた。
「だが、あいつらのように恥を忍んで生き延びたところで、いつまで生きるつもりだ？

この先百年も生きやしまいし、晩おそいか早いか、どうせ一度は死ぬる身ではないか」

「そうだ、どうせ一度は死ぬる身だ」と、小平太は自分で自分に言つて聞かせるように呟つぶやいた。

「それが分らないんだから情けないね」と、それまで黙っていた庄左衛門もぼつり口を出した。そして、三人ともそれぎり黙ってしまった。

「しかしね」と、しばらくして勘平は、何やら一人で考えているように言いだした。「俺に言わせれば、今になって返らぬことじやあるが、このように敵討を延び延びにされた太夫のしかたもよくない。第一、それがために、吾々の仕事が方々へ漏れてしまった。今までのところでは、それも別段差支えないようなものの、しかしだんだん士氣の沮喪してきたことは争われないぞ。せめてこの春にでも事を挙げられたら、百二十五人が五十人を欠くまでには減らなかつたらうに！ それを思うと、どうも残念でたまらないよ」

聞いている二人は思わず顔を見合せた。なるほど五十一人残っていた同志が、二人の逃亡によつて、もはや四十九人になつていた。

「最初の脱盟者は例の高田郡兵衛だ」と、勘平は相手がそこらにでもいるように、一方を睨みつけながらつづけた。「あいつもこの春までは、安兵衛殿、孫太夫殿と並んで、硬派中の硬派と目されていた。それがどうだ、脱盟者の魁となつてしまつたではないか。安兵衛殿の話に聞けば、何でも旗本の叔父から養子にと望まれたが、だんだんそれを断つてい

るうちに、そばにいた兄が弟は仇討の大望を抱いているから、お望みに応じかねるのだと、

うっかり口をすべにらしてしまった。叔父はそれを聞いて、『なに仇討？ それは大変なことを考えている。天下の直しきさん参として、そんなことを聞き捨てにはならぬ』と言い張って、どうしても承知しない。そこで、叔父の言葉に従わなければ、大事が漏れて御一統にも難儀をかけるから、恥を忍んで身を退くと断って、連盟から脱退したということだよ。なるほど、その言分だけを聞けば、いちおうもつものようにも思われるが、そのじつはどうだか分つたものじゃないね。それほど儀を重んずる心があるなら、なぜ自分からまず腹を切らないのだ？ 命を捨てたら、どんな分らない叔父でも、まさか一統に迷惑を懸けるようなこともしでかすまい。それをしえないで、おめおめと養子になって生き延びているのは、何といつても命が惜しいからだよ。ね、そうじゃないか」

「そうだ、命が惜しいからだ」と、小平太は反射するように言った。実際、彼は自分でも何を言っているか分らなかつた。彼はただ郡兵衛の脱盟した前後の事情のあまりによく自分が兄から言われた言葉に似ていることだけが分つていた。そして、自分が郡兵衛の立場に置かれたらどうするだろうと、そればかり考えていた。

その晩横になつてからも、小平太はやっぱり中村鈴田両人のことが気になつて、どうしても寝つかれなかつた。中田理平次一人の時は、まだしも考えなおした。が、その後から

また二人の反逆者が出た。しかも、自分が朝夕顔を合せていた者の中から出た。彼は考えこまずにはいられなかった。

「二人はさんざ勘平から恥じしめられた。が、その代りに命を助かった。そうだ、恥を忍べば、まだ助かる道はあるのだ」

そう思つて、小平太は自分ながらはつとした。武士が命を惜しむの、卑怯者だのと言われたらそれまでだ。それが最後の宣告である。彼はまだそれを超越するほど頹廢的になつてもいなければ、またそれほど人として悪摺れてもいなかった。

「そうだ、高田郡兵衛が最初の脱盟者になつて、俺が最後の脱盟者になる？ そんなことはありえない、断じてあつてはならない！」

彼は一晚中輾々てんてんはんそく反側して、やつと夜明け方にうとうととした。

九

師走しわすの二日には、深川八幡前の一旗亭きていに、頼母子講たのもしこうの取立てと称して、一同集合することになつてゐた。討入前の重大な会議のこととて、その日は安兵衛も、勘平も、小平太も

打揃うちそろうて午過ぎから出かけた。

頭領大石内蔵助も定刻前から子息主税を連れて遣つてきた。そのかたわらには、吉田忠左衛門を始めとして、原総右衛門、小野寺十内、間瀬久太夫などの領袖連が坐流れた。で、一同の顔も揃つて、いよいよ会議に入ろうとする段になつても、どうしたのやら、一足後れてすぐ後から来るはずになつていた小山田庄左衛門の姿が見えない。すでに同宿の者の中から二人まで裏切者を出していることとて、安兵衛も、勘平もしきりに気を揉もんだ。中にも勘平は、自分が一走り行つて見てきよう、そこらにまごまごしていたら引揃ひっつかんで連れてくるとまで言いだした。が、吉田忠左衛門はずかにそれを制して、

「この場に莅のぞんで変心するような臆病者をむりに引張つてきてもしかたがない。ここに御出席の方々は、皆亡君のために一命を投げだしている者どもでござるぞ。その方々の手前もある。打捨てておきなされ」と、言葉鋭く言いきつた。勘平も理りの当然に服して、そのまま黙つて控ひかえていた。

いよいよ起請文きしよもんの前書が読み上げられた。これは仇討の宣言綱領といったようなもので、次の四箇条からなりたつていた。いわく

一、冷光院殿御尊讐れいこういんでんごそんしゅう吉良上野介殿討取るべき志きらこうづけのすけどのこれある侍ども申合せ候さむらいとこ

ろ、この節におよび大臆病者ども（こころをかえ）変心退散仕候者撰み捨て、ただ今申合せ必死相極め候（めんめん）面々は、御靈魂御照覧遊（ごしょうらあそば）さるべく候こと。

一、上野介殿御屋敷へ押込（おしこ）働の儀、功の浅深（せんしん）これ有べからず候。上野介殿印揚（しるあげ）候者も、警固（けいご）一通（ひとと）の者も同前たるべく候。然（しか）ば組（くみ）合（あ）働（あ）役好申すまじく候。もつとも先後の争致すべからず候。一味合体（いちみがつたい）いかよの働役に相（あい）当候とも、少しも難（なんじゆ）渋（う）申すまじき候こと。

一、一味の各存寄申出（おのおもんじよりもうしいで）られ候とも、自己の意趣（ふくみまたげ）を合申妨候儀（あ）これ有まじく候。誰にても理の当然に申合すべく候。兼て不快の底意（あり）これ有候とも、働の節互に助け合い急を見継ぎ、勝利の全（ま）と（つ）ころを専（も）に相働（も）べきこと。

一、上野介殿十分に討取候とも、銘々（めいめい）一命（いのち）遁（のが）べき覚悟（の）これなき上は、一同に申合せ、散（ちり）々に罷成（まかりなり）申まじく候。手負（ておい）の者これ有（あり）においては、互（ひ）に引懸（ひ）助け合い、その場へ集申（あ）べきこと。

右四箇条相背候（あいそむ）わば、この一大事成就（じやうじゆ）仕（か）ま（つ）つら（ら）候。然（しか）ばこの度退散の大臆病者と同前たるべく候こと。

この草案は吉田忠左衛門の手になつた。忠左衛門のほかには、原総右衛門一人それに参

与したと言われる。で、それを一同に読み聞かせた上、異議がなければ、ただちに神文へ血を注いでもらいたいと言いだされた。もちろん、誰一人として異議のあろうはずもなかった。そこで大石内蔵助良雄から同苗主税良金、原総右衛門元辰、吉田忠左衛門兼亮ねすけというように、禄高ろくたかによつて、順々に血判をすることになった。

小平太は小山田庄左衛門が姿を見せないと知った時から、ほとんど一語も口を利かなかつた。が、起請文きしょうもんが自分の前へ廻された時には、顫える手先を覚られまいと努めながら、それでも立派に毛利小平太元義と署名して、その下に小指の血を注いだ。そして、それを次の勝田新左衛門に渡した。

こうして大石内蔵助以下寺坂吉右衛門にいたるまで四十八人の血判がすんだ時、さらに当夜の人々にんにんこころえ心得こころえが議に附せられた。これも忠左衛門の手になったもので、当日定め刻限が来たら、かねて申合せた三箇所へもの静かに集合すべきことという第一箇条を始めとして、敵の首を揚げた時は、骸は上衣に包んで泉岳寺に持参すること、子息の首は持参におよばず打捨てること、なお味方の手負いは肩に引懸け連れて退くことが肝要だが、歩行難なんしゅう波の首尾になれば、是非におよばず首を揚げて引取ること、そのほか合図の小笛、鉦、退口のこと、引揚げ場所のこと、途中近所の屋敷から人数を繰りだした場合の

挨拶、上杉家から追手がかかった時の懸引、なおまた討入って勝負のつかぬうちに御檢使が出張になった場合、それに応ずる口上にいたるまで、すべて十二箇条にわたって残る限なく討入の手筈てはずを定めた上、最後に退口のことを念頭に置いては、かえって心臆するかもしれない、しかし退いても一定助からぬ吾らの身である、申すに及ばぬ儀なれど、めいめい必死の覚悟にて粉骨碎身ふんこつさいしんすべきことと結んであった。これには二三質問も出た。が、入念な忠左衛門の説明に、一同満足して、異議なくそれを承認した。

それから当夜の各自の扮装いでたち、討入の諸道具についても話があった。これはそれまでにめいめいその準備したくをしていることではあるが、持合せのないもの、または当夜に限って必要なもの、たとえば槍、薙刀なぎなた、弓矢の類を始めとして、斧、鎧おのこすがい、玄能げんのう、懸矢かけや、竹梯子しこ、細引ほそびき、龕灯がんどう、提灯ちようちん、鉦どらというようなものは、かねてその用意をして平間村に保管してあるから、明日、明後日両日の間に、それぞれ取寄せておいてもらいたい。ただしそんなことから事の破れになつてはならぬというので、人目に立たぬように、それに關与する人数から役割まで定めて、それぞれ言いわたされた。

こういう風に相談が多端たたんに互わたつたために、頼母子講たのもしこうは夜に入つてようやく散会となった。散会となるや、安兵衛と勘平とは庄左衛門のことが氣になるので、宙を飛ぶようにして林

町の宿へ駈け戻った。小平太もその後つに随ついて走った。が、そんな時分に、駈落者がそこらにうろうろしているはずもない。安兵衛は取散らした荷物ひきだしの間に坐まつて、机の抽斗ひきだしを開けては、しきりに小首を傾げ始めた。

「何か見当りませぬか」

「ふむ、金子きんすが少々足りないようだ。それに、拙者の小袖こそでも見当らない」

「なに、金子？」と、勘平と小平太もあわてて駈け寄った。

「いや、御安心ください。大石殿からお預りして、おのおの方にお渡しするはずの金子は、別にしまっておいたからだいじょうぶでござる。ただ手前の小遣い銭が少々紛失ふんしついたした」

「それはそれは」と、二人ともしばらく開いた口が塞ふさがらなかつた。

「それにしても」と、勘平はまた猛たけりたつた、「何という卑劣な所業しよぎようでござりましょう。脱盟して吾々の顔を潰つぶすさえあるに、他人の金品まで盗んで逐電ちくでんするとは！」

「いやなに」と、安兵衛はしずかに言った。「浪人すれば、永い間にはそんな気にもなりましょう。どうせ吾々を見限つて一列を脱けた人だ、追及するにも当るまい」

「じゃと申して、吾々の面目にも——」

「だからまあ、金のことはあまり言わぬようにいたしたい。吾々にあつてもあまり役に立たぬもの、これから先生き延びる人にはなくてならぬものだからな。はははは」

「そういえば、そんなものでもござろうか、あはははは」と、勘平もいっしょになつて笑つてしまつた。

小平太は最初庄左衛門が脱盟したと知つた時、ほとんどその訳が分らなかつた。ああいう一徹な父親を持つている上に、平生ひじろからずいぶん口幅くちつたいことも言つていた男が、この期ごに及んで逐電する！ 彼にはどうしてもありうべからざることのように思われた。が、その一面においては、どういうものか、先せんを越されたというような氣もした。自分ではまだ遁亡とんぼうしようとも何とも思つていなかつた。けれども、心のどこかで、やつぱりそういう氣のしたことだけは争われぬ。そして、庄左衛門が満座の中で諸士から罵倒ばとうされるのを聞いていた時、まあまあ自分でなくなつてよかつたというような安心を覺えた。しかるに、今宿へ戻つて検しらべてみると、庄左衛門は他人の金品まで持ち逃げしている！ これは下司げす下郎げろうの仕業しわざで、土にあるまじきことだ。こうなると、小平太ももう自分のことのような氣はしなかつた。いくら勘平が罵倒しても、他人のこととして平氣で聞き流すことができた。そのため、彼はかえつて救われたような氣もした。

明くる朝安兵衛は、とにかくこのことはいちおう頭領にも届けておく必要があるというので、早朝から出かけて行つた。その後で小平太は、一人火鉢ひばちに向つて、ぼんやり考えこんでいた。隣の座敷では、勘平が何やらしきりに書状を認したためている。この間にひとつおしおの許ところへ行つてやろうか、あの女に逢うのももうこれがおしまいだなぞと考えているうちに、隣の間から勘平が片手に書状を持って出てきて、

「ちよつと出かけるから留守を頼むよ」と言つた。

実際、中村、鈴田、小山田とだんだん同宿の者が減つてきては、飯めしたき焚きの男を除けば、もう小平太のほかに留守をするものもなかつた。小平太はまた先を越されたなと思ひながら、「よろしい！」と言つた。そして、「飛脚を頼みに行くのか」と訊きいてみた。

「うむ、あんまり臆病者がたくさん出るので、心外でたまらぬから、いちいち筆ひつちゆう 誅しゆを加えてやつた」と、勘平は問はず語りに話した。（ついでながら、勘平のこの書状は、江戸における赤穂浪士の動静を知る貴重な材料として、今に伝わっている）「だが、戻もどり路りにはちよつとよそへ廻まわるつもりだから、少し晚おそくなるがいいか」

「ああ、ゆつくり行つておいで」

勘平はそのまま出て行つた。が、それと入れ違いに、前に出た安兵衛が戻つてきて、

「小平太どの、ひとつ平間村まで御足労を願いたい」と言いだした。

聞けば、この宿が当夜の集合所の一つになっている。それについては、昨夜の相談では、当夜の諸道具はめいめいの宿へ持ちこむことになっていたが、やはり一部分はここへ集めておいた方がよからうということに模様が変わったので、御足労だが、これからすぐに取りに行ってきたもらいたい。もつとも、大石殿の若党室井左六が仲間どもを連れて先へ行っているから、それらのものに持たせて、貴公はただ宰領してきてもらえばいいというのだ。小平太は領承してすぐに立ち上った。

平間村までは往復八里の道である。目黒から間道を脱けて行つたが、それでも帰路は夜に入つた。小平太は亥の刻前によく戻つてきて、自分で指図をして、それぞれ片づけるものは片づけさせてしまった。もちろん、安兵衛や勘平も手伝つた。で、いよいよ寝につこうとした時、そばに寝ていた勘平が、

「おい、小山田の遁げた原因が分つたぞ」と、声を潜めてささやいた。

「ええ？」と、小平太は思わず振返つた。「それはまたどうしたというのだ？」

「先達てからあの男は」と、勘平は蒲団の上に取りかかたままつぶやいた。「よく湯島の伯母の許へ行くといつては出かけたものだ。なに、それが伯母の家でも何でもない、天

神下の湯女の宿だとは、俺もとうから見抜いていた。だが、なにも他人の秘密を託くでもなし、何人にもありがちのことだと大目に見ておいたがね、今になってみると、それがこちちの手脱りだったよ。で、まだそこらにまごまごしていたら、引捕まえて糺明してやろうと、今日出たついでに、そちらへ廻つてみた。なに、天神下の湯女の宿は三軒しかないからすぐ分つたがね。だが、行つてみて驚いたよ。庄左衛門の相手の女というのも、昨夜から姿を見せないというので、向うでも大騒ぎをしているのだ。てつきり二人謀し合せて駈落をしたものに相違ないね。こうなると、どこまで下司にできてるか方途が知れない。俺もよけいな暇潰しをしたようなものの、そんな奴かと思つたら、やつと諦めがついたよ」

「そうか!」と言つたまま、小平太は何とも返辞ができなかつた。ただもう自分が糺明を受けているような気がして、胸は早鐘を撞くように動悸を打つた。

「だが、女のために大儀を衍る」と、勘平はまたごろりと横になりながら言った。「考えてみると、気の毒なものじゃね。こうしてだんだん糺と糠とが撰り分けられるんだよ」

「そうだ、糺と糠とが撰り分けられるのだ」と、小平太はようやくそれだけ言った。

勘平は言うだけ言うと気が納まつたか、そのままやすやすと寝入りかけた。が、小平太

はそうは行かなかつた。夜着の襟えりに手を懸けたまま、長い間蒲団の上に起きて坐っていた。そして、口の中では、絶えず「靦つと糠ぶ、靦つと糠ぶ！」と呟つぶやいていた。

最初彼は相手が自分に当てつけるために、わざと庄左衛門の女の話を持ち出したのだと思つた。が、考えてみると、そんなはずはない。もしおしおのことを感じていたら、そんな遠廻しに持ちかけるようなことは言うまい。勘平はそんな男ではない！ で、おしおのことはまだ何人だれにも知られていない、それだけはたしかだ。が、それにしても、自分はもう二度とあの女に逢つてはならない。この間から四五日遠退とんたいしていたのを幸いに、このまま顔を見ないで行く！ 不人情かはしらぬが、それよりほかに俺の取るべき道はない。

あの女も後でそれを聞いたら、俺のことをさのみ悪くは思うまい。――

「そうだ、俺はもう断じて逢わないぞ」

そう心に誓つた時、彼はやつと安心して横になつた。そして、眼を瞑つぶつたまま、

「なに、俺はただ眼を瞑つて吉良邸へ飛びこみさえすればいいのだ」と呟つぶいた。「その後には生きるも死ぬるも向う次第だ。お上かみでいいようにしてくださいさる！」

彼はいつになく晴れ晴れとした気持になつた。それに昼間の労れもあつて、そのままぐっすり寝こんでしまつた。

十

明くる朝眼を覚した時は、またいつもの小平太になっていた。けれども、昨夜立てた誓いを守つて、どこへも出まいと思つた。そうだ、俺はどこへも出なければいい。そして、安兵衛と勘平の後に喰つついてさえいれば間違ひはない、大義を衍あやまるような恐れは断じてない。そう思つて、彼は一日じゆう宿に引籠つていた。そして、その日は何事もなく過ぎた。

ところが、四日の朝になつて、思いも寄らぬ通知が頭領の手許から一般に達せられた。それは、来る六日には、將軍家がお側御用人松平右京太夫の邸へお成りなになる旨、不意に触れだされた。それによつて、吉良家でも当日の茶会を御遠慮申しあげることになつた。ついでには、五日の夜と極めた一条も自然延期せずばなるまい。いずれ後からまた委くわしいこととは通達するが、それまではかまえて静穩しづまにしているようにしたのであつた。

小平太は張り詰めた気が一時に弛ゆるんで、妙にがっかりしてしまつた。彼には討入の日の延びたということがちつとも嬉しくなかつた。なるほど、五日の夜は延びた。ぼうつとし

て考えていると、何だか仇討というようなことは夢のように遠い空のかなたへ消えてしまつて、そんな日は永久に遣つてこないような気もしないではない。しかもその日は厳然としてあるのだ。それだけはけつして動かない。いつかはまた弛んだ気を引締めて、いったんほぐした覚悟をもう一度しなおして懸らなければならぬ。それが彼には辛かつた。そんなことはとても自分の力には及ばないような気もした。

彼はもうどうする気もなかつた。で、一日二日は宿に引籠つたまま、うつらうつらとしていたが、そのうちにまたおしおのことが想いだされた。そうだ、この可厭いやな気持から免まぬかれるためには、やっぱりあの女に逢いに行くほかない。なに、庄左衛門は女のために大義あやまを衍あやまつたかもしれないが、俺の怖ろしいものは別にある。それは自分の心だ！ こうして一人でくつくつ考えていたら、しまいにはどんなことをしでかすか分らない。そうだ、そんなよけいなことを考えないためにも、俺はまずあの女に逢わなければならない。そう思つた時、彼はもう矢も楯たてもたまらなくなつて、すぐに支度をして宿を飛びだした。

が、女の家に近い時には、それでもまた勘平に言われた言葉が気になつた。といつて、そのまま引返す気にもなれないので、うじうじしながら、とうとう女の家のきばの軒端のきばをくぐつてしまつた。

女の方では、そんなこととは知らないから、久しく逢いに来てくれなかつた恨みを言うことも忘れて、心しんから嬉しそうにしながら、

「久しく見えなんなのは、どこかお悪かつたのか。そういえば、お顔の色もようない」と、心配そうに訊ねた。

「なに、そう気に懸けてくれるほどのことでもない」と、小平太は面倒臭めんどうくさそうに言った。彼にはもう当座の嘘うそを言うのが億劫おっくうになつていた。といつて、真実ほんとうのこととも言われなかつた。

「だつて、心配になりますわ」と、おしおもさすがに言い返した。「見えると言つても見えもせず、たまたま来れば、いやな顔ばかりしていらつしやるんだものを」

「じゃ、来なければよかつたね」と小平太は気短に言った。

すると、女はすぐに気を変えた。「わたしが悪うござんした。お気合きあいの悪いところへよけいなことばかりお訊ねして、もう何にも申しますまい」

こう言つて、おしおは相手の気を逸そらすように、ほかの事に話しを移した。「わたしもあなたの妻になる身で、あんな茶店に出ていたとあつては、後々どんな障さわりにならうもしいれない。幸い、さる人のお世話で、今度松坂町のさる御大家の仕立物を一手ひとてで縫ぬわせてい

ただくことになりました。まあ、これを見てくださいます。今もこんなに来ているくらいだから、どうか、わたしのことは安心して——」

「なに松坂町？」と、小平太は思わず聞耳を立てた。「その御大家というのは、何という家だえ？」

「ええ、中島伊勢様とおっしゃる大奥お出入りの御鏡師ということでございますの」と言いながら、何と思つたか、おしおはきゆうに顔を赧らめた。「何でもその嫁御寮は、吉良様の御家老とやらから来ておいでじやということでございますわ」

「ふむ、そうか」と、小平太は腕を拱いで考えこんだ。そういうことがあるとすれば、いつそこでこの女に大望を打明けて、その手蔓で何事かを聞きだすようにしようかと思つてみた。が、この間兄に言つてしくじつたことを思えば、迂濶に打明ける気にもなれなかつた。それに、相手は女のこと、どんなことから事の破れになろうもしれない。まあまあと思ひ返して、「そうか、主家を滅ぼした敵の片割れに縁のある家の仕事をして、身過ぎをするのも時代時節、まあ何事も辛抱だね」と言つておいた。

その日宿へ帰つた時、小平太は勘平に向つて、今日中島伊勢の宅へ出入りをするお物師とちよつと知合になつたがと漏らしてみた。すると、相手は無性に喜んで、

「そいつはうまいことをした。中島伊勢に娘をくれた家老といえ、やっぱり小林平八郎のことに相違ない。ちよつとそんな話を耳に挟んだこともある。ぜひそいつはもつと立ち入つて探索しろ」とすすめてくれた。

で、その明くる日からは、小平太も大びらで宿を出て、おしおを訪ねることができた。が、女の顔を見ると、別にそんなことも言いださなければ、女の方でも、その後中島伊勢のことはふつとり口にしなくなつた。ただ小平太はこうして毎日女の顔を見に行つた。

が、一方では、兄新左衛門のことも気にかかつていた。ああして一時をごまかしてきたもの、あれから一度も姿を見せないから、今ごろどんなに不安に思っているかしのれない。もつとも、兄の気性としては、あれだけ言つておいたものを、自分に無断で、はやまつて一党に迷惑を懸けるようなことはすまい。なれど、長い間には、自身の不安から、何をしでかさないと限らない。五日の討入が延びた時には、いつそ安兵衛に事情を打明けて、兄の前だけでも同盟を脱退したように繕つてもらおうかとも考えてみた。が、高田郡兵衛のことを思うと、うっかりしたことを言いだして、どんな疑いを同志から受けまいものでもない。それを思えば、どうしてもそんなことは言いだされなかつた。時には、打明けた方が疑いを除くゆえんだとも思わないではなかつたが、やっぱり何物かがあつて彼を引留

めた。で、とつおいつ思案している間に、とうとう言いだす機会を失ってしまった。

ただ彼は自分の住所を兄に知られていた。そのうちには、向うから訪ねてくるかもしれない。訪ねてこられたら一大事だ。彼は戸口に聞える足音にも胆きせを冷すようになった。よそから戻ってきてても、まず留守中に誰も訪ねてこなかったと知るまでは安心ができなかった。

そんな不安な日を送っているうちにも、日数は経つて、師走しわすの十一日になった。この日同志の一人大高源吾はふたたび宗匠山田宗徧ところの許から、来る十四日きたいよいよ上野介の自邸において納めの茶会ちあひが催もよされる、その後は年内に白金の上杉家の別墅べつしよへ移られるはずだということまで聞きだしてきた。こうなればもう猶予ゆうよはできない。それに十四日は先君せんくんの御命日でもあるから、その日を期して決行しようと、即座に一決して、頭領大石内蔵助からそれぞれ一党つうだつに通達つうだつされた。

小平太はまた黙りこんでしまった。何だか非常に遠い所にあるように思っていた黒雲が、きゆうに目の前へ覆おほい被かぶさつてきたのである。が、安兵衛も勘平も冷静にその通告を受けて、もうするだけの用意はしてしまった、いつでも来いと言わんばかりに落着きすましている。二人の前へ対しても、小平太は自分の落着きのないのが恥ずかしかった。どうかし

てそれを覺られないように落着いていようと思うけれど、二人と顔を合せていると、何となく心の底まで見透されるような気がしてたまらない。それでも、その明くる日いっぱい、じつと辛抱して宿に残っていた。が、夕方になると、もうたまらなくなって、兄の許へ母親に逢いに行くという口実こうじつの下もとに、ぶらりと家を出てしまった。もちろん、兄の許へなぞ行く気はなかった。こうなればもう行く必要もなし、また事実行かれもしなかった。彼の行かれる所としては、天上天下、ただおしおの家だけであった。

彼は途を歩きながらも、「何のためにあの女に逢いに行く？」と考えてみずにはいられなかった。「俺はいつたいあの女をどうしようと思っているのだ？」それには彼も自分ながら返辞ができなかった。

「可哀そうに」と、しばらくして彼はまた考えつづけた、「あの女も今に及んで俺がどんな心を抱いて、どんな苦しみを嘗なめているか、まるで知らないでいるのだ！ こんな便りない男を手頼たよりに生きてきて、その男さえこの世にいなくなったら、これから先どうして生きて行くだろう？ 考えてみれば、まったく不仕合せの女には相違ない！」

ふと、「あの女を殺したら？」というような気が心のどこかでした。「そうだ、いっそのこと、あの女を手に懸けて殺したら、俺も本気で死ぬ決心がつくかもしれない」

が、そう思うと同時に、彼は自分でも自分の残忍な心に吃驚したように飛び上った。これまで自分の本心を明さないで、始終欺き通しに欺いてきた上に、最後に自分が死の覚悟をする手段として、相手の女を手に懸けようとする？ 俺の心は鬼か蛇か。まったく自分ながら愛憎の尽きた男だ！

彼は眼を瞑ってその心を払い退けようとした。いつそのまま女の顔を見ないで引返してしまおうかとも思ってみた。が、そう思っただけで、足はやっぱり向いた方へ歩いて、だんだん女の家近づいていた。

何も知らないおしおは、例によつて愛想よく男を迎えた。

「今夜は少しゆつくりしてもいいように、同宿の者へも頼んできた。晩くなったら、ここで泊つてもいいのだ。これでひとつお酒を購つてきてくれ」と、小平太は懐中から小粒を一つ出して渡した。

「まあ珍らしい、お酒を召しあがる？」と、おしおは可訝そうに相手の顔を見返したが、「でも、ゆつくりしていいとおっしゃるのは嬉しい。わたしもじつはこの間から聞いていただきたいと思つていることもある。では、すぐに行つて参じましょ」と、いそいそとして出て行つた。

ものの十分とは経たないうちに、おしおは五合徳利に風呂敷に包んだ皿を提げて戻ってきた。そして、しばらく台所でこそそこそ遣つていたが、間もなく膳の上に着と銚子を揃えて持ちだした。小平太も火燵から這い出して、膳に向つたが、さされるままに一つ二つと盃を重ねた。日ごろは三杯と飲まぬうちにもう真赧になつてしまふのだが、今夜はどうしたのやらいくら飲んで酔いを発しない。薬でも呑むようにぐつと呑み乾しては、そのまままた猪口を差出すので、

「まあ、そんなに召しあがつてようござりますか」と、おしおは注ぎかけた銚子を控えて、思わず窘めるように言った。

「なに、かまわぬ、注いでくれ」と、小平太は持った盃を突きつけるようにした。

「まあ、泊つて行つてもよいとおっしゃるなら、少しはお酔いになつてもよかる」と、おしおは思いなおしたように、またなみなみと注いだ。

小平太はその盃にちよつと唇をつけたまま、下に置いて、

「さつき言った、わしに話したいというのは、そりや何だ？」と、不意に言いだした。

「ええ」と、おしおはみるみる顔を赧らめながら、「そりやまあ後でもいいことじゃわいな」と、その場をまぎらそうとした。

「そうか」と、小平太はまた盃を口へ持つて行った。「言いたくなければ聞かんでもいい」
 男の顔は蒼味あおみを帯びて、調子は妙に纏もつれかかっていた。

「いいえ、言いたくないことはない。どうしても聞いてもらわにやならぬことだけけれど…
 …」

「じゃ、言ったらどうだ？」

「ええ、あのそれは」と、おしおは口籠くちしもりながらつぶけた。「いつぞやから、今度逢つたら言おう言おうと思つていましたが、何だかまたよけいな御心配をかけるような気もして…：じつは前の月からわたし見るものを見ませんの」

「え？」と、小平太はぎくりとしたように言った。「ではあの、お前が妊娠にんしんした？」

おしおは黙つてうなずいてみせた。

「そうか！」と、彼は太い息を吐いた。

「でも、まだよくは分りませんのよ」と、おしおは相手の顔色を見て、すぐに言いなおしにかかった。「ただわたしがそう思っただけ…：そんなにお気に懸けるのなら、申しあげなければようござんしたのにねえ」

「なに、言つてくれた方がいいんだ」と、小平太は下を向いたまま言った。

「だって心配そうにしていらつしやるんだものを」

「気に懸けんでもいい。子どもが生れるとなれば、俺もいつそう気が締るといふものだ。とにかく、お前にこの上の苦勞はさせんから、心配するな。それよりも一杯注いでくれ！」と、また盃を突き出した。

おしおはちよつと相手の顔を見返したまま、黙つてその盃を充^{みた}した。

「心配せんでもいいぞ」と、小平太はまた繰返した。「日ごろ言つたわしの言葉に間違ひはないからな。それに間違ひさえなけりや、お前が氣を揉^もむことはあるまい」

「ええ、それはもうそうに違ひございませんけれど……」

「それならもつと注いでくれ、わしは今夜久しぶりに酔つてみたいのだ」

こう言つて、小平太はおしおに酌^{しやく}をさせては、ぐいぐいと飲み干した。そして、一本の銚子が空になると、また二本目までつけさせた。が、二本目を飲みきらないうちに、苦しくなつて、そこに倒れてしまった。そして、横になつたまま、苦しうに胸を波打たせていた。おしおは氣を揉んで、枕を当てがったり、頭を水で冷したり、いろいろ手を尽して介抱してくれた。それまでは覚えていたが、そのうちに少し胸^{むな}先^{さき}が楽になつたと思つたら、いつの間にかうとうとと寝入つてしまった。

夜半よなかに咽喉のどが煎いりつくような気がして、小平太は眼を覚した。気がついてみると、自分
 はちやんと蒲団の上に夜着を被かけて寝ていた。枕頭には古びた角行灯かくあんどんがとぼれて、その
 下の盆の上には、酔いぎめの水のつもりであろう、土瓶どびんに湯呑まで添えておいてあつた。
 彼はいきなり片手を伸ばして、それを引寄せようとしたが、ふと自分と床を並べて寝てい
 るおしおの姿が眼にとまった。

「そうだ、俺はおしおの家に寝ているのだ！」

彼はぎよつとしたようにその手を引っこませた。それにしても、もう何時なんどきだろう？
 晩おそくなるとは言つてきたが、今夜自分が帰らないのを見たら、俺まで庄左衛門の二の舞い
 をしたものと極めて、横川がまたいつものように腹を立てていはせぬか。まあ、それは言
 い解とく術すべもあろうし、明日の朝早く顔を見せさえすれば、それですむ。すまぬは宵よいにおし
 おから聞いた話だ。もしあの話が真実ほんとうだとすれば、俺はどうしたらいいか。肚はらの子こに惹ひ
 かれて、このままここに居坐りでもしたら、それこそ庄左衛門と選ぶところはない。俺も
 小山田といつしよにだけはなりたくない！

「いつその女を手懸けたら！」と、途中で考えたことがふたたび彼の心に甦よみがえつてきた。
 「そうだ、ここまで追詰められては、俺もこの女を道伴侶みちづれにするほかに救われる道はない。

不便ながらも、お前の命は貰ったぞ！ 何事もお主のためと観念して、一足先に行つてくれい。それがお前にとつても一番いい道かもしれない、その肚に宿ったという不幸な子どものためにも！」

彼は頭だけ持上げて、そつと隣の寢床を見遣つた。おしおは尋常に枕をしたまま、こちらを向いてすやすや寝入っている。その整つた安らかな寝息が、いかにも男に信賴して、身も心も任せきつていように見えるように見えていじらしい。

「何も知らずに寝ているなあ！」

こう彼は呟いたまま、しばらく女の寢顔に見惚れていたが、何と思つたかきゆうに首を縮めて、またすつぽり夜着を引被つてしまった。彼にはこの女を手懸けるなぞということではできそうにもなかつた。が、できなければどうしようというのだ？ もう一日経てば、否でも応でも白刃と白刃と打合う中へ飛びこまなければならぬ身ではないか。こんなことではならぬならぬと思ひながら、思えば思うほど腕が萎えるような気がして、どうにもならない。彼はただ暗がりの中にまじまじと眼を睜いていた。

そのうちにどこかで一番鶏が鳴いた。

「もう夜が明けるのかしら？」

彼は夜着をはぐつてもう一度顔を出した。が、宵まどいした鶏でもあつたか、つづいて啼く鳥の声も聞えなかつた。

「そうだ、今のうちに決行しなければ、俺はいよいよ不義者になつてしまふのだ！」

彼は一思いにがばと跳ね起きて、いきなり壁ぎわに寄せておいた小刀を取るなり、すらりとその鞆を払つた。そして、行灯の灯影に曇りのないその刀身を透してみた。新刀ながら最近研師の手にかけたものだけに、どぎどぎしたその切尖から今にも生血が滴りそうな気がして、われにもなく持つている手がぶるぶると顫えた。

「あなた、お目覚めになりましたか」と、不意に背後からおしおが声を懸けた。

小平太はぎくりとして、思わず振返つた。そのはずみに、手に持った白刃がぎりりと闇に光つた。それが眼に入ったのか、

「まあ、あなた！」と言つたまま、おしおはいきなり飛び起きてしまった。そして、

「あなた、どうなされました？ 気でも狂つたのか、そんなものを手に持つて！」と、やにわに男の腕に縋りついた。

「うむ、待て、危殆い！ 待てと言つたら待て！」と、小平太は狼狽えながら、その手を振り放そうとした。

「いえいえ放しませぬ、訳を話してくださいさらぬうちは、けつしてこの手を放すことではござりませぬ」と、女はいよいよ力を籠めて、一心に武者振りついた。

「話す話す、訳を言うからその手を放してくれ」と、小平太はようよう女の手をほどこいて、刀を鞘に納めた。

「さ、早う言つてくださいませ」と、女はその刀を取つて自分の背後へ片づけてから、男の前に膝をすすめた。「わたしというものもある身で、短気な心を出さんしたその訳を、有様に言つて聞かせてくださいませ」

「話すと言つた上は、そう言わんでも、きつと話して聞かせる」と、小平太も蒲団の上に坐りなおした。「だが、どんなことを聞こうとも、かならず吃驚して騒ぐまいぞ」

おしおは黙つてうなずいてみせた。

「今まで隠しておいたは、なるほどわしが悪かった。とうに打明けようとも思ったが、それもならず、いわばわしは最初からそなたを瞞していたようなものじゃ。ま、せいしてくれるな。よくしまいまで聞いてから、そなたの存分にしてくれたがいい、じつは去年三月のことがあつて、一家中残らず浪人してちりぢりばらばらになったとはいふものの、相手の吉良家はあのとおり何のおかまいなし、このまま御主君の妄執も晴らさずにおいては、

家中の者のいちぶんた一分立たずと、御城代大石内蔵助様始め、志ある方々が集まって、寄り寄り
 仇討の相談をなされた。その連名の中へ、わしも去年の暮から加わったのじゃ」

おしおは眼を睜みはつたまま、目まじろぎもせず男の顔を見詰めていた。

「林町に家を借りて、堀部安兵衛どのそのほかの方々と同宿しているのも、じつを言えば
 仇きゆうか家の動静を窺うかがうためにほかならない。同志の方々はそれぞれ仲間小者、ないし小商人
 に身を落して、艱かんなん難なん辛苦しんくをされるのも皆お主しゆうのためだ。わしもその中に交つて及ばずな
 がら働いているうちに、天神の茶店でそなたに出逢ったのがわしの因果いんが、大事を抱えた身
 と知りながら、それを隠して、ついそなたと悪縁を結んでしまった。ああとんだことをし
 たと思つた時は、もう晚おそい。どうせ末遂すえとげぬ縁と知りながら、これまで隠していたのは重
 々そなたに申訳ないが、これも前世の約束事と、どうか諦めてもらいたい」

「いえいえ、それをおつしやつてくださるにはおよびませぬ」と、おしおは顔たもとに袂たもとを押当
 てたまま、おろおろ泣きだしてしまった。「そんな深いお心があるとも知らず、これまで
 いっしょになれの引取つてくれのと、女氣の一筋に、おせがみ申したのが恥ずかしい。ど
 うぞ、どうぞその後を聞かせてくださいませ」

「最初に嘘を言ったのがわしの因果いんが」と、小平太も顔を背向けながらつつづけた。「その後

は打明けるにも明けられず、悪いとは知りながら、だんだん悪縁を重ねているうちに、いよいよ吉良邸へ乗りこむ日が来てしまった」

「え、それはいつのことでござんすえ？」と、おしおは思わず顔を上げた。

「来る十四日、明くればもう明日の夜に迫っているのだ」

「それでは明日の晩吉良邸へ乗りこんだら、あなたはもうそれぎりお帰りにはなれませぬか」

「うむ、一党残らず死ぬ覚悟で乗りこむのだ。たといその場で討死せいでも、天下の御法ごほうに背そむいて高家へ斬りこむ以上、しよせん生きては還かえられぬ。だがな」と、小平太はきゆうに声を落してささやいた、「そなたの思わくも面目ないが、どうもわしは未練があつて、この期ごに及んでまだ死ぬ決心がつかぬ。わしの死んだ後で、お前がどうして暮すだろう、どうしてその日を送るだろうと思うと、いくら考えなおしてみても、そなたを一人残してはどうも死にきれない。で、すまぬことじゃが、お主おしゅうのためには代えられぬ、いつそお前を手に懸けて——」

「ええッ！」

「お前は思い違いをしたようじゃが、いつそお前を手に懸けておいて、その足でお供ともに立

とうと、寝ているのを幸い、そつと刀に手を懸けたところをお前に眼を覚されたのじゃ」
 「まあ！」と言つたまま、おしおは俯向うつむいて考えこんでしまった。が、ややあつて、思い入つたようにむつくり顔を上げた。「あなたのお心はよう分りました。だが、なぜそうならそうと訳を聞かせておいてから、手に懸けようとはしてくださらぬ。身分こそ卑いやしければ、わたしも浅野家の禄ろくを喰はんだものの娘でござんす。父はあのと通りの病身な上に、そんな企てが皆様方のうちにあるとも知らず死んで行きました。私どもは女子のこと、そんな話を聞かしてくれる人もなければ、知りもせず、これまでは夢中で暮してきたようなもの、知らぬうちはともあれ、この上はあなたのお邪魔になつてはすみませぬ。わたしは覺悟を極めました！」

「なに、覺悟を極めたとは？」と、小平太はうろたえ気味に聞き返した。

「はい、どうせあなたと別れては、誰一人たよるものもないわたしの身、後に残つて、一人で生きて行こうとは思ひませぬ。どうぞわたしを手に懸けておいて、潔いさぎよう敵かたきうち討うちのお供をしてくださりませ」

こう言つて、おしおは男の前へ身体を突きつけるようにした。

「さ、その刀で一思いに殺してくだされませ。それほどわたしの身を思うてくださるあな

たのお手に懸つて死ぬのは、わたしも本望でござんすわいな」

「ま、待て、待てと言つたら、少し待つてくれ！」と、小平太はすっかり周章あわててしまつた。「そういちがいに言われても、わたしにはお前を手に懸けることはできそうもないわい」
「え、何と言わしやんす？ そんならわたしゆえに未練が出るから殺しに來たとおつしやつたは、ありやお前本気ではござりませぬかえ」

「いいや、本気じゃ、本気には相違ないが、殺せと言われて、現在かわいい女房、それも肚に子さえ宿つたというものを、そうやみやみと手に懸けられるものでない。ううむ、待て、わしは一人で行くと覚悟をした！ お前はどうか後に残つて、氣の毒じゃが、その子を育てて行つてくれ」

子どものことを言われて、おしおは思わず帯のところへ手を遣つて、じつと頸垂うなだれたまま考えこんでしまつた。

「それにわしの死んだ後で、たとい忠義の士よ、お主しゅのために命を捨てた侍さむらいよと、世に持もたてられる身になつても、わしの身寄りの者が誰一人それを聞いていくれるものがないかと思えば、何となくうら淋しい氣もする。なに、わしの兄はあつても、あれはもうわしの身寄りではない。身寄りといつては、お前一人だ。そのお前が後に残つて、忠義の侍よ、

あれを見よと、わしが世間から囃されるのを聞いてくれたら、同じ死ぬにも張合があるというもの。わしは思いなおした。どうかわしの言うことを聞いて、後に生き残つてくれ！」

おしおはやつぱり俯向いたまま、何とも言わなかった。小平太は氣を揉んで、

「な、わしの言うことは分つたらうな？ 分つたら、どうか得心とくしんして、わしの言うことを諾きいてくれ、な、な！」と、女の背に手を懸けながら繰返した。

「そうあなたのお覚悟がつけば」と、おしおはようよう顔を上げた。「なるほど、わたしは後に残つて、あなたの武名が上るのを蔭ながら見させていただきましょう。まだ海のものとも山のものとも分りませぬが、もしお肚やの嬰兒やが無事に生まれましたら、立派にあなたの跡目あとめを立たせます。どうぞそれだけは安心して、後へ心を残さぬように、屑いさぎようお主の敵を討つてくださりませ」

「そうか、それでやつとわしも安心した」と、小平太は本当に安心したように言った。

「なに、妻子を後に残して行くものは、わしばかりではない、同志の中にはいくらかもある。わしだけが妻子に心ひを惹かされたとあつては、同志の前へも面目ない。ただお前をこれまで内密ないしよにしておいたのが氣の毒じゃが、なに、それもわしは決心した。明日にもお頭大かしら

石内蔵助様のお目にかかつて、お前のことを包まず申しあげておくつもりだ。そうすれば、お前は天下晴れてわしの女房、誰に遠慮もきがね気兼ねもないというものだからね。ただどうもこれまで一同の前へ包んでおいたのがようないが、なに、こうなれば、そんなことに遠慮も要るまい。わしはそうすることに決心したよ」

「そうしてくだされば、わたしもどんなに嬉しいかしれませぬ」と、おしおも心しんから嬉しそうになつこりした。

こうして二人は夜の明けるまで互に尽きぬ思いを語り明した。そして、夜の白々明けを待つて、「もう二度とは顔を見せないぞ」と言いおいたまま、小平太は思いきつて、袂たもとを振りきるように、その長屋を出てしまった。

十一

小平太が林町の宿へ帰ってきた時は、まだ夜が明け放れたばかりであつた。勘平は一人起きだして、雨戸を繰っていた。そして、小平太の顔を見ると、
「おお毛利か、帰ってきたな」と、いつものように声を懸けた。

「いや、昨夜は御心配をかけてすまなかつた」

「なに、別段心配はせんがね、ただ時日が迫っているの、何かまた異変でも生じた時、君が居合せないために、後で臍ほぞを噛むようなことがあつてはならぬと、ただそれだけを案じたよ」

「ありがとう、母がまた癩しやくを起してね、まあ、これが最後だと思つて、宵終よっびてついていて看護してきたよ」

「で、別にたいしたことはないのか」
「いや、いつもの持病だ。気がかりなことではないさ」と言いながら、小平太は極きまりの悪そうに、こそこそ自分の居間へはいった。

同志から疑いの眼で見られるのも辛い、それよりも、この期ごに及んでなおその前つくろを繕うために、同志を欺あざむかねばならぬということが、小平太にはいかにも心苦しかった。そうだ、これはどうしても頭領に届けでるほかはない。一刻も早く届け出でて、その御裁ごさい可かを得ておく。もつとも、こんなことまで太夫たゆうの耳に入れるのは、いかがとも思われぬではないが、たとい女には関係しても、小山田など一つでない証拠を見せるためには、思ひきつて何もかも白状してしまうほかない。そうすれば、俺もいよいよ後へは退かれなくな

る道理だ！ ただこんなことを太夫に申入れるには、誰か人をもつてするのが本当かもしれないが、差当つてそれを打明けるのに恰かつこう好な相手も同志の中には見当らない。なに、かまうものか、場合が場合だ、面押つらおしぬぐ拭つて自分で申しあげることにしよう。そう決心するとともに、彼はその日の昼過ぎから、ちよつと石こくちよう町まで伺候しこうしてくると同宿の二人に断つて、ぶらりと表へ出た。

急ぎ足に小山屋の隠宅まで来てみると、頭領大石は今国元へ送る書面を認したためていられるというので、すぐには面会ができなかつた。同じ宿に泊つている潮田うしおだ又之丞、近松勘六、菅谷すがのや半之丞、早水はやみ藤左衛門なぞという連中は、一室置いた次の間に集まつて、上かみの間に気を兼ねながらも、何やらおもしろそうに談話はなしをしていた。時にはわれを忘れて大きな声も出した。小平太はその中に加わつたようなものの、ほかの連中は皆百五十石、二百石取りの上じようし土ばかりで、三村次郎左衛門を除いては、元の身分が違うから、何となく話しもそぐわないような気がして、黙つて隅の方に控ひかえていた。同志は「もつとこちらへ出られよ」と勧めてくれたが、遠慮してそばへ寄らなかつた。次郎左衛門はもともと士分とも言われぬ小身ものだけに、自分もそのつもりで、始終起つたり坐つたりしながら、忠実まめに一同の用を達していた。

内蔵助の書いている書面というのは、赤穂の元浅野家菩提ぼだいしよ所華岳寺の住職惠光、同新浜正福寺の住職良雪、自家の菩提所周世村すせの神護寺住職三人に宛あてたもので、自分が江戸へ下つてからの一党の状況を報じて、いよいよ一挙の日も迫つたことを告げた上、

「このたび申合せ候者そうるものども四十八人にて、斯様かように志を合せ申す儀も、冷光院殿この上の御外聞と存ずることに候。死後御見分のため遺しおき候口上書一通写し進じ候。いずれも忠信の者どもに候間、御回向ごえこうをも成下なげべく候。その場に生残り候者ども、さだめて引出され御尋ね御仕置にも仰附おおせつけらるべく、もちろんその段人にんにん々覚悟の事に候。御心易かるべく候云々」と書いてあつた。死後御検分のため遺しおく口上書とは、二日に深川八幡前で認めた仇討あだうちの宣言書と起請文きしやうもんのことで、その中には毛利小平太の名も歴然として記載されてあるこというまでもない。なお内蔵助はそれについて、己おのが妻子のことにも言い及んで、

「はたまた拙者妻こと、京より離別わかまつ仕り縁者方へ返し申候。倅、娘儀いかように罷成まかりなり候ともそれまでの事に候」といい、さらに平常方外ひじょうの友として、その啓沃けいよくを受けた良雪に對しては、

「良雪様、去年以来の御物語、失念つかまつ仕らず、日々存じ出し、このたび当然の覚悟に罷成りかたじけなき次第に御座候。日ごろ御心易く御意を得候えうろう各々様ゆえ、別して御残多く、御暇かたがたかくのごとく御座候、恐惶謹言」と結んでいる。で、それを書いてしまうと、若党室井左六、加瀬村幸七の兩人をそばへ喚よんだ。かねてその旨吩咐いいつけられていたので、兩人とも旅支度をして脚絆きやはんまで穿はいていたこととて、その書状を受取るなり、一同に暇とまこ乞こいして、涙を拭き拭き出て行つた。

で、この隙間ひまに太夫に会つてと、小平太は腰まで上げたが、吉田忠左衛門が来て、何やら太夫と打合せをしていると聞いて、またその腰を卸おろしてしまった。そして、ふたたび黙つて諸士の話しに耳を傾けた。

「今ごろから出かけて、あの二人は日のあるうちにどこまで延しますかな」と、一人が言つた。

「さ、脚の早い者として、六郷までは参りましようか。今夜は川崎泊りですよ」

「日の短いごろですからな」と、また一人がそれに応えた。「それにしても、あの主思いな二人の忠節といい、それを出してやられる太夫のお心のうち、昔の鬼王、童三どうぎが古事ふるごとも想いだされて、拙者は思わず貰い泣きをしました」

「さようさよう。同じ大石殿の家来ちゅうの中にも、瀬尾孫左衛門のような人非人にんびにんもあれば、またあんな忠義なものもある。まさかの場合になつて、始めて人の心は分るものでござるな」

こんな話を聞いてみると、小平太には、せっかく太夫に聞いてもらおうとした自分の用事が取るに足りないばかりでなく、何だが滑稽こっけいのようにも思われてきた。自分としては一生懸命だが、人が聞けば、何と思つて今ごろそんなことを言いだすかと、頭から一笑に附ふせられるかもしれない。そう思うと、彼は自分が何のために遣つてきて、何のためにこうして待つているのか分らなくなつた。それに、忠左衛門の用談はよほど大切なことと見えて、いつまで待つても果てそうにない。彼はだんだん尻をもじもじし始めた。

「時に太夫は京師けいしを出発される前に妻子を離別してこられたと承うけたまわるが」と、一人がまた言いだした。「後のちのち々々のちのちのことを思えば、それも分別あるしかたと申すもの、近松どの、貴殿はいかがなされた？」

「妻子のことはとんと忘れてい申した」と、勘六はむつつり口を開いた。「なに、なるようになる分のこと、そこまでは考えていられませぬわい」

「拙者は離縁状だけは渡してまいりました。しかし相続人としてはなし、渡さぬからとて、

女子どもにはお咎めもござりますまい」

「拙者も御同様」

「拙者も……」

が、こんな話しになると、さすが死を決した面々もだんだん悒鬱ゆううつになって、しまいは皆黙つてしまった。聞いている小平太には、いよいよ自分の用事が滑稽こっけいに見えてきた。「他人は皆、ある妻子まで離別して、出かけてきている。それなのに、自分は今生死の境に立つて、新あらたに妻を迎えたと、それも内密ないしよで、拵こしらえたと、そんなことがどうしてお頭の耳に入れられよう？ ばかな！」

そう思うとともに、きゆうに身繕みづくろいして、

「誠に長座をして失礼いたしました」と、諸士に一礼して立ち上つた。

「お小平太どの、お帰りか。何か太夫に火急な用事でもあつたのではござらぬか。お急ぎなら、吾々からお取次ぎいたそうか」と、口々に言つてくれた。が、そんな明らさまに、他人に言われるような用事ではない。

「いや、ありがとうはござりますが、さしたることもござりませぬ。おりもあらば、また重ねて参上しまして」と言い捨てたまま、そこそこにその隠宅を出てしまった。

彼は真直に林町の宿へ戻ってきた。そして、一間ひとまに閉じ籠こもったまま、誰とも顔を合せないようにしていた。彼としては、何よりもおしおにした約束を果さなかったことが気に懸おつた。こうなれば、あの女はもう自分の死後も自分の妻と名告なることはできない。妻も子も永遠に日蔭の身である。もつとも、同志の士は皆妻子を離別してきたというが、それとこれとは話が違う。あの女は一生おの己れを扶助ふじよしてくれるはずの良人を失った上に、しかもその良人を誰と名指すこともできない。そして、その名指されぬ良人の子を纖弱かよわい女手一つで育てて行かなければならない——これから先永い永い一生の間！ あの女としては、そんな思いをして生きて行くよりも、自分の妻として、公然お上のお咎とがめに逢いたかったかもしれない。お咎めに逢って、もしお仕置しおきになるものならなつて死にたかつたかもしれない。それを知りながら、せつかく石こくちよう町まで出かけて行って、何にも言わずに還かへってきた自分はいったいどうしたというのだろうか？

「どうかしたら」と、彼はまた一人で考えつづけた、「俺は太夫にそんな内情まで打明け
るが恐ろしかったのではないか。そんな内情まで打明ければ、俺は義理にも太夫そむに背くこ
とができなくなる。もちろん、俺は太夫を裏切るような気はない。気はないが、なおそこ
に一分の余裕を存ぞんしておくために、わざと太夫に逢わずに帰ってきたのではあるまいか。

考えてみれば、兄新左衛門のいきさつを同宿の安兵衛に打明けようとして、とうとう打明けずにしまったのもそれだ。打明けずにさえおけば、いつでも兄とした約束を真実ほんとうにすることができるといふゆとりがある。不埒ふらちでも、狡猾ずるいでもない、俺はただそのゆとりが欲しかったのだ。今日でももし太夫に会って、いつぞやのような優しい言葉でも懸けられようものなら、俺はすぐにもこの人のために死にたくなる。それが怖ろしかったのだ！」

彼はもうそんな風にして自分の心を見詰めるに堪えられなかった。で、夜はまだ早いが、蒲団を敷いて一人でごろりと横になった。が、どうしても瞼眼まぶたが合わないで、とうとうまんじりともせずに一夜を明した。

十二

いよいよ十二月十四日、吉良邸討入の当日とはなった。その日は朝から霏々ひひとして雪が降っていた。月こそ変れ、先君内匠頭の命日である上に、今こん生じょうの名残りというので、大石内蔵助を始め十余名の同志は、かねての牒しめしあわ合せに従って、その日早く高輪泉岳寺にある先君の墓碣ぼけつに参拝した。堀部安兵衛も同宿の毛利小平太、横川勘平を代表して、そ

の席に列つらなつた。で、ひととおり読経と焼しょうこう香こうがすんだ後、白銀三枚を包んで寺僧いに致いたして、一同別席でお齋ときについた。それから暫時ざんじ人払いをした上、その席上で内蔵助から最後の打合せがあつた。そして、後刻を約して散会になつた。

安兵衛は八つ前に宿へ戻つてきた。すぐに小平太と勘平の二人を前へ喚よんで、今日の次第を物語つた上、「討入の手配はかねて覚書によつてめいめいに伝えられたとおりでござる。一同は今夜丑うしの上刻までに、この宿と、本所三つ目杉野十兵次どのの借宅と、前原神崎兩人の店と、この三箇所へ集合することになつている。なおわれら三人のうち、横川氏は大石殿の手に属して表門へかかり、拙者と小平太どのは主税どのの手に属して裏門へ廻ることになつたから、その心得でいてもらいたい。で、それまでは格別用事もござらぬによつて、用の残つている方は用達しに出られるのも御勝手だが、当家は一党の集合所になつてゐることでもあり、かたがた晩おそくとも子ねの刻までにはここへ戻つてきているようにしてもらいたい。拙者はこれからこの旨を伝えるために、両国米沢町の養父の宅まで参るが、約束の刻限までにはかならず戻つてくるから」と言いおいたままふたたび出て行つた。その後で、勘平と小平太とはしばらく顔を突合せていた。小平太には、何よりもこうして同志の者と向い合つて、落着かぬのに落着いた顔をしているのが辛かつた。時刻は一いちじく

分刻きぎみに刻々と移つて行く。いつそ早く定めのの刻限が来てくれたらとも思つてみた。そうしたら、この苦しみから免のがれられるかもしれない。その刻限が来るのは恐ろしい。しかしそれを待つてゐるのはいつそう怖ろしい！ そんなことを考えてゐるうちに、勘平は何と思つたのか、小平太に向つて、

「おい、今日はどうして出かけないのだ？」と言いだした。「俺はこちらに縁辺いずかたもなし、訪ねてやる知しりびと人とてもない。ま、留守は俺がしてゐるから、今夜が最後だ、何方へなりとも行つてこられい」

小平太はその言葉に救われたような気がした。で、考える間もなく、

「そうか。では、気の毒じやが、何なにぶん分頼むよ」と言つたまま、そわそわと宿を出てしまつた。

が、出るには出ても、小平太には別段どこへ行く宛もなかった。おしおとはもう昨日の朝「二度とは会わんぞ！」と言いおいて別れてきた。それに、あの女と交した約束も果さないで、今さら逢いに行かれるものでない。そうはいうものの、いつもの癖か、足はおのずと柳島の方角へ向いていた。が、気がつくつと、弾はじかれるように方向を転じて、わざと向島の土手へ出た。それから渡船とせんを待ち合せて、待乳山まつちやまの下へ渡つた時は、もう日もとつ

ぷりと暮れていた。彼は先を争って上る合客の後から、のっそり船着場を上って行きながら、何のためにこうして雪の降る中を宛もなしに歩いているのか、自分でもよく分らなかつた。

「そうだ」と、彼は河岸かしの上に立つて、真黒な水の面おもてを見返りながら考えた。「俺はまだ死ぬ覚悟がついていないのだ！ ついていなければこそ、こうして亡者のようにふらふら歩き廻っているのだ。だが、死ぬ覚悟をするために、俺はどれだけ苦しんできたろう？ なるほど、俺は命が惜しい！ 生れついでついでの卑怯者かもしれない。だが、命が惜しいからといって、俺はまだ一度も命を助かろうとしてもがいた覚えはない。ただどうしたら命が捨てられるか、安んじて死んで行かれるかと、ただそればかりを今日まで力つとめてきた。それがためには、俺はかわいい女房をも殺そうとした。兄に大事を打明けたのも、じつはそのためだ。それでいながら、俺にはまだ死ぬ覚悟がつかない——この期ごに及んで、この土壇場たんぱにのぞいで！ 俺はいつたいどうしたらいいのだ？」

どうしたらいいかは、彼にももちろん分らうはずがなかった。彼はまたふらふらと歩きだした。

「ほかの連中は皆命を軽石ほどにも思っていないらしい。俺はどうしたらこの未練らしい

執着しゅうじやくの根を絶つて、ああいう風になれるのだ？」

そう思いながら、彼はさすがに人通りの罕まれな日本堤の上を歩いていた。後から「ほい、ほいッ！」と威勢のいい懸声をしながら、桐油とうゆをかけた四つ手籠すが一丁そばを摺り抜けて行く。吉原の情婦おんなにでも逢いに行く嫖客きやくを乗せて行くものらしい。が、彼はそんなことにも気がつかなかった。賑にぎやかな廓くわくの灯を横目に見ながら、そのまま暗い土手の上を歩きつづけた。そして、だんだん歩いているうちに、とうとう坂本から上野の山下へ出てしまつた。

山下へ出た時は、手も足も寒さに凍こごえて千断ちぎれそうな気がしたので、とある居酒屋が見つかつたのを幸い、そつと暖簾のれんをくぐつた。あり合せの鍋物あつらを誂てじやくえて、手酌てじやくでちびりちびり飲みだしたが、いつもの小量にも似ず、いくら飲んでも思うように酔よわなかつた。それでも彼は、自分で自分を忘れようとしてもしているように、後から後からと銚子ちようしを重ねた。

一刻いっときばかりして、彼がその居酒屋を出た時は、もう子ねの刻に近かつた。が、彼はすぐに両国の方へ引返そうとはしないで、何と思つたか、元来た坂本の道を真直に千住の大橋に向つて歩きだした。その時はもう雪も止んで、十四日の月が皎々こうこうとして中ちゆうてん天てんに懸

つていた。通りの町家は皆寝鎮ねしずまっていた。前を見ても後を見ても、人通りはない。自分では酔わぬつもりでも、脚はかなりふらふらしていた。彼はその千鳥足ちどりあしを踏み締めながら、狂人きちがいのように、どんどん雪を蹴けつて駈かけだした。

大橋の上まで来た時、小平太ははっとしたように吾に返った。

「いつたい、俺はどこまで行く気だろう？ それよりも、今はもう何剋なんどきだろう？」

彼は橋の上に立ち停とつたまま、頭の上の北斗星を見遣みやった。

「そうだ、丑うしの上刻うし！ それまでに宿へ帰らなければ、もう間に合わない！」

彼は背後うしろから鉞まさかりで殴打どやされたように躍おどり上あった。

「もう何剋だか知らないが、千住の大橋から両国までは一里あまり、丑の刻までには行き着かれそうにもない。俺はどうとう時刻を逸はした。俺は同盟どうめいから外ほかれてしまった。俺は人外んがいに墮おちた、蛆うじむし虫むし同様どうようになつてしまった。もう明日から人にも顔は合あわされない。同志は今ごろ俺を何と言いつてるだろう、何と言いつて罵ののしっているだろう？ 安兵衛は？ 勘平は？」

彼はよろよろと橋の欄干てすりに凭もたれかかって、両手に頭髪かみの毛けを引ひっつか拵かんだまま、「そうだ、俺は時刻に後れると知りながら、わざと後れるようにしかけたのだ、わざとこんな所へ来

てしまったのだ。何という俺は卑怯者だ、臆病者だ！ 生れついでに臆病が最後にとうとう俺に打克うちかつたのだ！」と呺つぶやいた。そして、そう呺きながら、だんだん雪の中に顔を埋めうずてしまった。

が、しばらくして、彼はまたむっくり顔を上げた。月は依然いぜんとして照っていた。が、その月も彼の眼には入らなかつた。

「だが、俺はそんなに臆病者かしら？」と、彼はぼんやりあたりを見廻しながら呺いた。

「俺はとにかく万死を冒わかして吉良邸へ入りこんだこともある。そして、当夜の一番槍にも優る功名ぞと、仲間の者から称美されるほどの手柄も立てた。しいて言えば、今夜の討入も俺の探索のおかげで極つたとも言われないことはない。それほどの手柄を立てた俺が、こんなことになってしまった。一生世間へ顔出しもできない卑怯者になってしまった。なぜだ？ なぜだか俺にも分らない！」

「いや、分らないことはない」と、彼は自分で自分に反抗するようにつづけた。「俺にはちやんと分っている。なるほど、吉良邸に入りこむいことは、九死に一生の危険を冒したものかもしれない。が、九死に一生でも、一生は一生だ。十が十の死ではない。そこに一つだけは、とにかく、生きられるかもしれないという宛がある。俺はその一つを宛に

して吉良邸に入りこんだのだ。あの場合、俺はけっして本当に死ぬ覚悟なぞしてはいなかったのだ。けれども、今夜吉良邸へ斬りこんだら、それこそ本当に十が十の死だ！ 公儀の手に召捕られて、お仕置場へ引きだされたら、どんなことがあつても免れようはない。牛や馬のように、首玉へ縄を結えつけておいて、むぎむぎと屠られるのだ。それはあまりに怖ろしい、あまりに人間性を蔑ろにしたものだ。そんな怖ろしい犠牲を主君は家来に向つて要求することのできるものだろうか。家来に扶持を与えておけば、その家来からそんな人間性を奪うような犠牲を要求してもいいのか。なに、殿の御馬前に討死せよというのなら、俺は立派に死んでみせる。けれども、けれども、今夜吉良邸へ討入ることだけは、俺にはできない、俺にはどうしてもできない！

「なに、ほかの連中は皆忠義の士と言われたさに、名という餌に釣られて、眼を瞑つて死の関門へ飛びこもうとしているのだ。眼を瞑つて死の関門へ飛びこむことは易い。難かしいのは、それよりも死の関門に到るまでの道程だ。死の関門を正視しながら、眼を開いてその中へ飛びこむだけの用意をすることだ。俺はこれまでそのためにあらゆる苦しみを嘗めてきた。死に到る道程の全部を歩いてきた。全部を経験してきた。それは同志の中の何人も知らないような焦熱地獄の苦しみであつた。おお、俺はそれだけでも許さるべ

きではないか。他人は何とも言わば言え、俺は俺自身に対して言訳が立つのではあるまいか」

こう考えてきた時、彼にはそれが動かすべからざる真理のような気がして、やや落着いてきた。で、雪の積った街路の上をじつと見詰めていたが、何と思つたか、またふらふらと立つて歩きだした。

「考えてみれば」と、彼はまた歩きながら呟いた。「横川も言つたように、頭領大石が討入の日をこんな延び延びにされたのもよくない。俺が死の苦しみを日々に嘗めてきたのも、そのためだ。最後にこんなことになつてしまったのも、そのためだと言わば言われないうこともない！もし仇討がこの春決行されたら、百二十余名の同志があつたはずだ。七十名に余る落伍者の中には、俺と同じように苦しんだものもあつたに相違ない。それをいちがいに不忠喚わりするのは当を得ない」

彼は在来の落伍者のためにも弁ぜずにはいられなかつた。が、その下から、在来の落伍者と自分とを同じように見るといふことが、何となく彼の反感を唆つた。

「だが」と、彼はまたすぐに考えなおさずにはいられなかつた。「仇討の連盟が百二十余名に達した時、ただちにそれを決行したら、なるほど百二十余名の者が一列に死についた

かもしれない。百二十余名は立派だが、その中にはまだ本当に死の覚悟のできていないものもあつたに相違ない。そういう生半可なまはんかのものを引連れて、吉良邸へ乗りこむということは仇討の美名もとの下に、一種の悪事を行うようなものではないか。死にたくないものを死なせる——というよりも、仇討に値いしないものを引率して仇討をするということが、悪事ではなくて何であろう！ よし吉良邸へ乗りこむことはできても、それでは御主君冷光院殿の前へは出られまい。そんな者の来ることを御主君は喜ばれないに相違ない。頭領はそこを考えていられた。いや、大石殿がそこまで意識していられたかどうかは分らないが、故意こいにしても偶然にしても、とにかく仇討を延び延びにすることによって、そういう生半可なものをすぐり落された、粃ぬかと糠ぬかとを選び分けられた。つまり俺もその試練に堪えないで篩ふるい落されてしまったのだ。俺は糠であつた、これまでの落伍者と同じように糠にすぎなかつたのだ！」

彼は押潰おしつぶされたように、へたへたと雪の中に倒れてしまった。

「そうだ、俺は糠だ、糠にすぎない！ 今夜討入った同志が真実ほんとうの粃であつたのだ。あの連中だとして、俺のような苦しみを嘗なめなかつたとは、どうして言われよう？ 彼らはよくその試練に堪えて、自分が粃であることを立証したばかりだ。俺は生れながらに実みのらな

い糠であつた。そして、永遠に救われない地獄じごくの鬼となつてしまつた」

彼は自分で自分の頭を打つて、雪の中を駆け廻つた。そして、「糠だ、糠だ！」と叫びながら、身体が痙攣ひきつるやうにのた打ち廻つた。

「そうだ」と、そのうちにふと頭を擡もたげた。「そうだ、まだ晩おそくはない。これからすぐに駆けつけよう！ 吉良邸へ駆けつけて、まだ一党が引上げないうちであつたら、同士に詫びて、せめて公儀へ召しあげられる囚めしゆうど人の中へでも入れてもらおう！」

そう決心するとともに、彼は立ち上つてよろよろと駆けだした。が、一丁ばかり駆けだした時、またよろよろと雪の中に倒れてしまつた。そして、もう二度とは立ち上らなかつた。

十三

明くる日は雪晴れのうらうらした日和ひよりであつた。その日一日じゆう、小平太はどこをどう歩いていたのか、人も知らず、おそらく自分でも分らなかつたに相違ない。とにかく、江戸の市中を、喰うものも喰わず、喪家そうかの狗いぬのように、雪溶けの泥濘でいねいを蹴たててうろつ

き廻つていた。そして、その暮方に、しやうすい 憔悴しきつた顔をして、ぼんやり両国の橋の袂たもとへ出てきた。

見ると、橋の袂の広場にひとだか 人簇りがしている。怪しげなかわらばん 瓦版売りが真中に立つて、何やら大声にどな 呶鳴っているのだ。――

「さあさあ、これは開かいびやく 闢以来の大仇討、昨夜本所松坂町吉良上野介様の邸やしきへ討入り、大評判の大仇討！ 忠義の侍四十七人の名前から年齢としまで、すっかり分つて、ただの三文！ ええ、大評判の大仇討、もうこれだけしかない、売れきれぬうちにお早く、お早く！」

「吉良……浅野浪士！……」という声が耳に入った時、小平太は思わず足を留めた。そして、群集の頭越しに、よびうり 喚売の男の顔をじつと穴の開くほど見詰めていたが、何と思つたか人込みを分けて、つかつかと前へ進み出で、

「おい呼売、一枚くれ！」と喚よんだ。

「へえありがとうございます、一枚！ もう後は五六枚しかありませんよ」

彼は手につか 掴んだ小銭を渡して、それを受取るなり、群集の眼を恐れるように、こそこそ

と薄暗い横丁へはいつて行つた。ひろげてみると、なるほど大石内蔵助をはじめ寺坂吉右衛門に到るまで——中にはもちろん間違つたのもあるが——同志の名をずらりと並べて、この方々は、去年三月殿中において高家の筆頭吉良上野介に斫りつけ、即日切腹、お家断絶となつた主君浅野内匠頭の泉下の妄執もうしゆうを晴さんために、昨夜吉良邸に乗こんで、主君の仇上野介の首級しるしを揚げ、今朝泉岳寺へ引取つて、公儀の大命を待っている。お上ではただ今老中方御評議の真最中だと、事の概略あらましが載せてある。

「さては首尾よく仇を討たれたか……そして、予定のごとく泉岳寺へ……」

彼はその華々はなばなしい進退しんたい行蔵こうぞうを目の当り見るような気がした。堀部安兵衛武庸たけつねの名も出ている、横川勘平宗房の名も出ている。が、毛利小平太の名は？ もちろん、そこに出ていようはずはない。彼は義士たちの明るい功名を想いやるにつけて、いよいよ自分の眼の前が暗くなるような気がした。

「どうしよう、俺はどうしよう？」

こう呟きながら、彼は手を負つた獣のように走りだした。が、どこへ行く宛もない。両国の橋を渡れば、もうじきそこが松坂町の吉良邸である。彼はそこへ近づくことを一番恐れているくせに、やっぱりここへ来てしまった。が、今ごろそこへ行つて何になろう？

「ああ、俺はもうどこへも行く所がない！」

もちろん、彼にはまだおしおの家があつた。が、こうなつた上は、もうおしおにも逢われる身ではない。今ごろ顔を見せたら、あの女がどんなに落胆がっかりして、どんなに泣くことであろう！ 事によつたら、自分を軽蔑するあまり、物をも言わずに突き出してしまふかもしれない。

で、女にも逢われないとすれば、小平太はいつたどこへ行くのだ？ 逢われない逢われないと思ひながら、彼の足はやっぱり柳島の方角へ向つていた。あれだけ近寄るのを恐れていた両国の橋を渡つたのも、考えてみれば、やっぱりおしおに逢いたさの一念からであつた。

彼はいつの間にか妙見堂の裏手まで来ていた。雪明りに透すかしておしおの家が眼にとまつた時、彼はぎくりとしたように足を駐とめた。そして、ためらうように窓の明りを眺ながめていたが、きゆうに足を旋めくらして二歩三歩帰りかけた。が、すぐにまた踏みとどまつて、「そうだ、これを最後に逢いに来たのだ。せめてよそながらでも顔を見て行こう」と呟つぶやいた、そして、考えなおしたように、また女の家に近い行つた。が、すぐに戸口をはいろうとはしないで、積つた雪を踏んで裏手の方へ廻つてみた。おしおの家の裏手には長屋

じゆうで使うようになっていた釣瓶井戸があつた。小平太はそのそばに立つて、月影を避けるようにしながら、じつと家の中に耳をすました。が、家の中はしんとして物音一つしない。そのうちに、窓の障子しょうじに女の影が射して、それが消えたかと思うと、「ちーん！」と鈴りんの音が聞えてきた。

「そうだ、今日はおしおの母の三七日みなぬかだ！ 仏壇にお灯ひでもあげているのだな」

が、おしおは下に坐つたまま、なかなか立ち上らない。小平太は窓のそばへ寄つて覗のぞいてみようかとも思ったが、長屋の者が水汲みずくみにでも出て、見つけられたらというような気がして、じつと我慢して立つていた。が、たまらなくなつて、一歩ずつだんだん裏の戸口に近づいた。そして、そつと戸の隙間から覗のぞいてみようとした時、不意におしおの立ち上る気はいがした。どうもこちらへ近づいてくるらしい。小平太は思わず一歩後へ退つたが、もう晩おそかつた。女は何の気もなくがらりと裏の戸を開けた。そして、思わぬ人の影に、「あつ！」と吃驚びっくりしたような声を上げた。それでも気丈な女だけに、手燭てしよくを上げて、おずおず相手の顔を見遣りながら、

「まあ、旦那様でしたか。こんな所に立つていらして、本当に吃驚びっくりしました！」と言いだした「いったいどうなすつたのでございますか？」

小平太は棒立ちになったまま、返辞もしなければ、また動こうともしなかった。

「今ごろお出でになろうとは存じませんので、一人で仏壇にお灯明あかしをあげていたところでした。さあ、どうぞこちらへおはいりくださいませ」

こう言いながら、おしおは先に立って家の中へはいろいろとした。

「はいつてもいいね？」と、小平太は始めて口を利きいた。

「まあ、何をおっしゃいますことやら、あなたのお家ではござりませぬか」と、おしおは手を取るようにして男を座敷へ上げた。それから行あんどん灯を持ちだして、小平太の前に手をつかえながら、あらためて挨拶あいさつをした。「もう二度とはお目に懸れぬようにおっしゃつてでしたのに、今ごろお出で遊あそばしたのは、ああ分わつた、お話しはなしのことはまたぞろ日延べになつたのでござりましようね？」

小平太は苦しそうに、ただ「いいや」とばかり頭振かぶりを棹ふってみせた。

「へえ？ 日延べにはならぬ。では、もう討入はすみましたかえ」と、おしおは思わず膝ひざを乗りだしてたずねた。

小平太はまた苦しげにうなずいてみせた。

「討入はすんだ！ それに今ごろここへお出でになつたのは？」と、おしおはいよいよ合あ

点てんが行かなそうに、男を見返した。

「おしお、もう何にも言ってくれるな」と、小平太は相手の顔を見ぬように、目眩まぶしそうに眼を反そらしながら言った。「わしは、わしは討うちいり入の数に漏れたのだ！」

「ええッ！」と、おしおは思わず身をのけ反ぞらしたが、また気を取りなおしたように、男の前へ詰め寄りながら、「討入の数に漏れた……とおっしゃるからには、やっぱりまだわたしに未練が残って……？」

小平太はやっぱり押黙ったまま俯うつむ向いていた。

おしおは男の膝に取りついて、「わたしいわれに、大切だいじの場合にあなたに後おくれを取らしたとあっては……わたしは生きている瀬がない……あの時も早う死のうと思つたに、あなたのお言葉に絆ほどされて、生き残つたがわしや口惜しい！ どうしよう、わしやどうしよう？」と、おろおろ泣きだしてしまった。

「いや、そうでない、そうでない！」と、小平太はさも苦しそうに顔面神経を引釣ひきつらせながら、ようよう口を切つた。「この前来た時、お前に未練があつて死にきれないように言つたのは、ありやわしの嘘じや。わしはやっぱり自分の命が惜しかつたのだ。命惜しさに、どうしても死ぬ覚悟ができなかつたのだ。おしお、堪かん忍にんしてくれ、俺はこういうやくぎ

な臆病者に生れついたのだ！」

おしおは思いも懸けぬ男の言葉に、ただもう訳も分らぬような顔をして、相手の顔を見返していた。

「ただ俺はこの臆病な心に打克うちかつて、立派に死んでみせようと、どれだけ心を砕くだいたことか。お前を手に懸けようとしたのも、そなたに未練があるというよりは、せめてお前でも殺したら、もう後へは退ひかれぬようになって、未練なわしの心にもどうぞ死ぬ覚悟がつこうかと、それを恃たのみにあんな真似まねを試してみたのだ。が、生れついて臆病なわしには、さあ殺せと身体を突きつけられては、手も下せず、せめて大石殿に二人の仲を打明けて、こういう訳だと申しあげてしまつたら、その打明けたということが力になって、義理にも後へは退かれまいと、またそれを恃たのみに帰つて行つた。が、明るる日大石殿に逢つてみると、大事を挙げる前日とて、そんなつまらぬことを言いだす暇もなく、すぐすぐ戻つてきたのが破滅もとの原因、それからはいっそう心がぐらついて、昨日きのうの夕方宿を出たきり、宛もなく町まちなか中をぶらついている間に、だんだん約束の刻限を切らして、大事の場合に合あわず、わしはどうとう世間へ顔の向けられない身となつてしまった。おしお、これを見てくれ、これを！」と言いながら、袂たもとからさつき兩國の橋の袂たもとで買った瓦版かわらばんを取りだし

て渡した。

「そこにもあるように、わしを除いた四十七人は立派に上野介の首級を上げて、泉岳寺へ引上げ、お上のお仕置しおきを待つていられる。わしはその仲間仲間に外れた。その仲間仲間に外れたばかりでなく、人間の仲間仲間からも外れてしまった！」

こう言つて、小平太は男泣きにしくしく泣きだしてしまつた。

おしおは渡された紙かみきれ片をひろげて、行灯の灯影に透して見たが、なるほど四十七人の名はあつても、小平太の名は出ていない。彼女はそれを手に持つたまま、そこに泣き崩れくずている小平太の姿と見較べていたが、恥みえも見得も忘れて、心の底を曝さらけだした男の意気地なさに、ただもう胸が迫るばかりで、何とも言うことができない。慄こらえに慄こらえた涙が胸に瘡つかえて、

「ひ、ひ、ひ——ツ！」と、これもその場に泣き伏してしまつた。

小平太はその泣声にむっくり顔を上げた。そして、しばらく女の打顛う胴体を見入つていたが、何と思つたか、

「おしお、さらばじゃ！」と言つたまま、すつくと立ち上つた。

おしおも吃驚びっくりして顔を上げた。

「血相変えて、今ごろどこへ行きなさんす？」

「どこへという宛もない」と、小平太は立ったまましおしおとして言った。「わしはただ、よそながらでもお前の顔が見たさに、恥を忍んでここまで来たばかりだ。わしはもうお前の良人と呼ばれる値打はない。お前もわしのようなものと縁を結んだのが因果じやと諦めてくれい。こうしてお前の顔を見たのをせめてもの慰めに、わしはただわしの行く所へ行くつもりだ！」

「まあまあ待つてください」と、おしおは立って小平太の袖そでに取とり継すった。「お前がそのように言わんすのももつともじや。もつともじやが、わたしはわたしでまだ言うことがある。まあまあ下に坐いてくださいなあ」

言われるままに小平太はふたたびなよなよと下しもに坐った。おしおはその膝ひざに取継つて、涙を持った眼まなこに下からじつと男の顔を見上げながら、

「今お前は俺のようなものと縁を結んだのが因果じやと言わんしたが、ほんに思えば、因果同志の寄合でござんすぞえ」と、しんみりと言いだした。「どんな男でも良人に持てば、わたしはお前の女房じや。お前が卑怯なら、わたしも卑怯、お前が臆病者なら、わたしも臆病者でござんす。女一人で身は立てられぬ。たとい世間で笑われようが、どうしようが、

わたしはどこまでもお前に随ついて行く……行きますわいなあ」

二人はいつかいつしよに固く手を取合つていた。

「わたしはそういう感じやほどに、かならず短気な心を出したり、慥くよくよしてわずらわぬようにしてくださいませ。なに、お江戸ばかりに日は照りませぬ。もし世間の笑いものになつて、ここで生きて行かれぬというなら、唐からてん天竺しゆくの果はてまでも、いつしよに行く気でおりますわいな」

「よう言うてくれた、よう言うてくれた！」

小平太は握にぎった女の手の甲の上に、はらはらと涙を落した。

「それでもまだ笑う者があつたら、是非ぜひがない、二人でいつしよに笑われましょう。どこまでも一人の男を守るのが女の道でござんすぞえ」

× × × ×

二人はなお夜を籠こめて語り明した。が、その夜のまだ明けきらぬうちに、二人手に手を取つて、日の光を恐れるもののように、いづくともなく姿を晦くらましてしまった。

青空文庫情報

底本：「日本文学全集18 鈴木三重吉・森田草平集」集英社

1969（昭和44）年9月12日発行

入力：土屋隆

校正：浅原庸子

2006年10月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

四十八人目

森田草平

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>